

# 習志野市津田沼二丁目遺跡

習志野郵便局・習志野津田沼宿舎新築工事埋蔵文化財調査報告書

平成13年3月

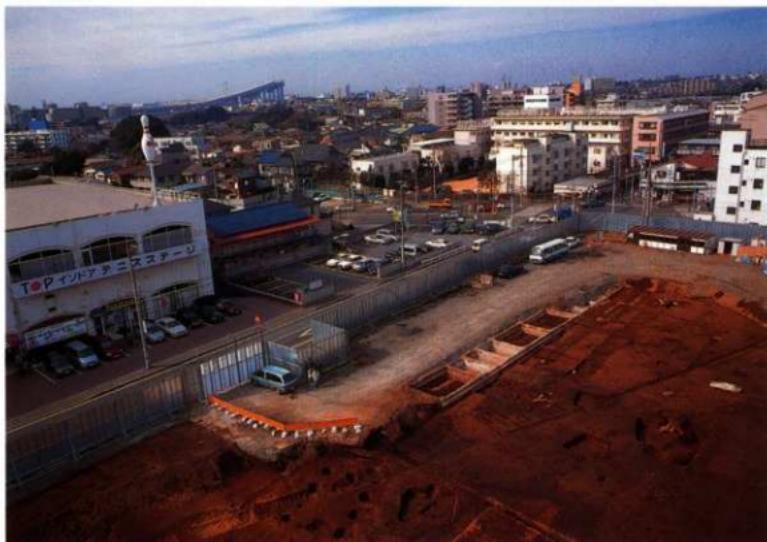
関 東 郵 政 局

財団法人 千葉県文化財センター

# 習志野市津田沼二丁目遺跡

習志野郵便局・習志野市津田沼宿舎新築工事  
埋蔵文化財調査報告書





遺跡北東より埋立地を臨む



S I -05号跡出土遺物

## 序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第407集として、習志野郵便局・習志野津田沼宿舎新築に伴って実施した習志野市津田沼二丁目遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、奈良・平安時代の集落跡が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成13年3月31日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 中村好成

## 凡 例

- 1 本書は、関東郵政局による習志野郵便局・習志野津田沼宿舎新築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県習志野市津田沼二丁目1,846-1ほかに所在する習志野二丁目遺跡(遺跡コード 216-001)である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、関東郵政局の委託を受け、財團法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査は、調査部長 沼澤 豊、北部調査事務所長 折原 繁の指導のもと、下記の職員が実施した。

発掘調査 平成11年11月1日～平成12年2月29日 主任技師 石田清彦

- 5 整理作業は、調査部長 沼澤 豊、東部調査事務所長 折原 繁の指導のもと、下記の職員が実施した。

整理作業 平成12年6月1日～平成12年9月30日 研究員 豊田秀治

- 6 本書の編集・執筆は、研究員 豊田秀治が担当した。

- 7 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育厅生涯学習部文化課、関東郵政局、習志野市教育委員会 白石浩氏 新開玲子氏、国立歴史民俗博物館教授 平川南氏、千葉県立房總風土記の丘研究員 郷堀英司氏ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。

- 8 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図 習志野市役所発行 1/2,500都市計画図「習志野7」

第6図 国土地理院発行 1/25,000地形図「習志野(N I-54-19-14-4)」

「千葉西部(N I-54-19-15-3)」

(地形分類については、国土地理院発行 1/25,000土地条件図「千葉」を参考にした。)

第7図上 千葉県立中央図書館蔵 明治8年製 「習志野原及周回村落圖」

第7図下 国土地理院発行 1/10,000地形図「習志野(千葉14-4-4)」

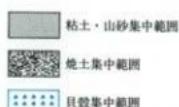
- 9 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和47年撮影のものを使用した。

- 10 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

- 11 挿図に使用したスクリーントーン及び記号、また観察表に示した残存率等の用例は、以下のとおりである。

### 凡 例

- ▲ 土器器
- ★ 墓壙土器
- 順造器
- 線刻土器
- ✖ 鉄 棒



土器観察表の器高・口径・底径の単位は、cm であり、復元長については( )で示している。

残存率については、ほぼ完形のものを1/1

器高・口径・底径の計測できたものを3/4

器高と口径又は底径の計測できたものを1/2

口径又は器高又は底径が計測できたものを1/3

として表示した。

口径・器高・底径が計測できないものは1/4

として表示した。

海面・旧水面・潮汐平地

低地【盛土・谷底平野・凹地・浅い谷・砂(礫)堆・後背低地】

台地【砂丘・低位面段丘】

## 本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の経緯と経過.....	1
第2節 調査の方法.....	1
第3節 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	3
第4節 層序区分.....	10
第2章 検出した遺構と遺物.....	11
第1節 旧石器時代.....	11
1 概要.....	11
2 遺構と遺物.....	11
第2節 縄文時代.....	11
1 概要.....	11
2 グリッド出土遺物.....	11
第3節 奈良・平安時代.....	11
1 概要.....	11
2 遺構と遺物.....	11
(1) 横穴住居跡と遺物.....	11
(2) 掘立柱建物跡と遺物.....	34
(3) 土坑.....	34
(4) ピット群.....	37
(5) グリッド出土遺物.....	39
第3章 まとめ.....	41
報告書抄録	

## 挿図目次

第1図	調査区の位置	2	第18図	S I - 06号跡	22
第2図	小グリッド呼称例	3	第19図	S I - 06号跡出土遺物（1）	23
第3図	上層調査範囲	4	第20図	S I - 06号跡出土遺物（2）	24
第4図	下層調査範囲	5	第21図	S I - 07号跡	26
第5図	基本土層図	6	第22図	S I - 07号跡出土遺物	27
第6図	遺跡の位置と周辺の遺跡	7	第23図	S I - 08号跡	30
第7図	遺跡周辺の状況	9	第24図	S I - 08号跡出土遺物	31
第8図	旧石器時代・縄文時代の遺物	10	第25図	S I - 09号跡	32
第9図	S I - 01号跡	12	第26図	S I - 09号跡出土遺物	33
第10図	S I - 01号跡出土遺物	12	第27図	S B - 01号跡	35
第11図	S I - 02号跡と出土遺物	13	第28図	S B - 02号跡	36
第12図	S I - 03号跡	15	第29図	S B - 02号跡出土遺物	37
第13図	S I - 03号跡出土遺物	16	第30図	S K - 01号跡・2号土坑	37
第14図	S I - 04号跡	17	第31図	S B - 03号跡	38
第15図	S I - 05号跡	18	第32図	北ピット群	39
第16図	S I - 05号跡出土遺物（1）	19	第33図	グリッド出土遺物	40
第17図	S I - 05号跡出土遺物（2）	20			

## 表目次

第1表	S I - 01号跡出土土器観察表	12	第10表	S I - 07号跡出土貝殻ブロックC集計表	28
第2表	S I - 02号跡出土土器観察表	13	第11表	S I - 07号跡出土貝殻ブロックD集計表	28
第3表	S I - 02号跡出土貝殻集計表	13	第12表	S I - 07号跡出土貝殻長集計表	29
第4表	S I - 03号跡出土土器観察表	16	第13表	S I - 08号跡出土土器観察表	31
第5表	S I - 05号跡出土土器観察表	21	第14表	S I - 09号跡出土土器観察表	34
第6表	S I - 06号跡出土土器観察表	25	第15表	S B - 02号跡出土土器観察表	36
第7表	S I - 07号跡出土土器観察表	28	第16表	グリッド出土土器観察表	40
第8表	S I - 07号跡出土貝殻ブロックA集計表	28			
第9表	S I - 07号跡出土貝殻ブロックB集計表	28			

## 図版目次

巻頭図版	遺跡北東より埋立地を臨む。S I - 05号跡出土遺物	
図版1	津田沼二丁目遺跡と周辺の地形	
図版2	津田沼二丁目遺跡調査範囲全景	
図版3	S I - 01・S I - 02・S I - 03号跡全景	
図版4	S I - 04・S I - 05号跡全景、S I - 05号跡遺物出土状況	
図版5	S I - 06号跡全景・遺物出土状況。S I - 07号跡全景	
図版6	S I - 08・S I - 09・S B - 02・S B - 01号跡全景	
図版7	出土遺物（1）	
図版8	出土遺物（2）	
図版9	出土遺物（3）	
図版10	出土遺物（4）	

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の経緯と経過

関東郵政局は習志野郵便局の老朽化と増大する郵便事業に対処するため、習志野郵便局・習志野津田沼宿舎新築工事を決定した。そこで、工事にあたり事業区域内に所在する埋蔵文化財の有無と取り扱いについて、千葉県教育委員会に照会した結果、当該事業地内には埋蔵文化財が所在することが判明した。その取扱いについて関係諸機関と協議した結果、事業計画の変更は困難なため記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

津田沼二丁目遺跡については、平成11年度に発掘調査が実施され、平成12年度に整理作業が行われた。平成11年度は調査対象範囲8,100m<sup>2</sup>のうち810m<sup>2</sup>の上層確認調査を実施し、奈良・平安時代の集落跡が確認された範囲3,420m<sup>2</sup>について本調査を実施した。

発掘調査の結果、奈良・平安時代の竪穴住居跡9軒・掘立柱建物跡2棟が検出され、遺物としては縄文時代の石器、奈良・平安時代の土師器、須恵器、獸骨、鉄滓、近世陶磁器が検出された。

## 第2節 調査の方法

事業区域は、民間企業の社宅跡地であり、東西方向に細長い建造物2棟が南北に存在していた場所であった（第1図）。そのため、随所に基礎部分が残っており、確認調査はこの基礎部分の間を縫う様にして行われた。特に北側の建造物は、高さ1m程の盛り土を行った上に建てられており、その基礎構築時に埋蔵文化財包蔵層が攪乱を受けているため、その部分の調査は不要と判断し、そこを取り囲む様に確認調査を行った。

事業は市街地における調査であるため、調査区の周囲を鋼板で囲って行った。確認調査時においては、調査範囲の長軸方向に沿った形で任意のトレンチを設定した。そして、基準杭を利用して、国家座標系に基づく位置を確認した。

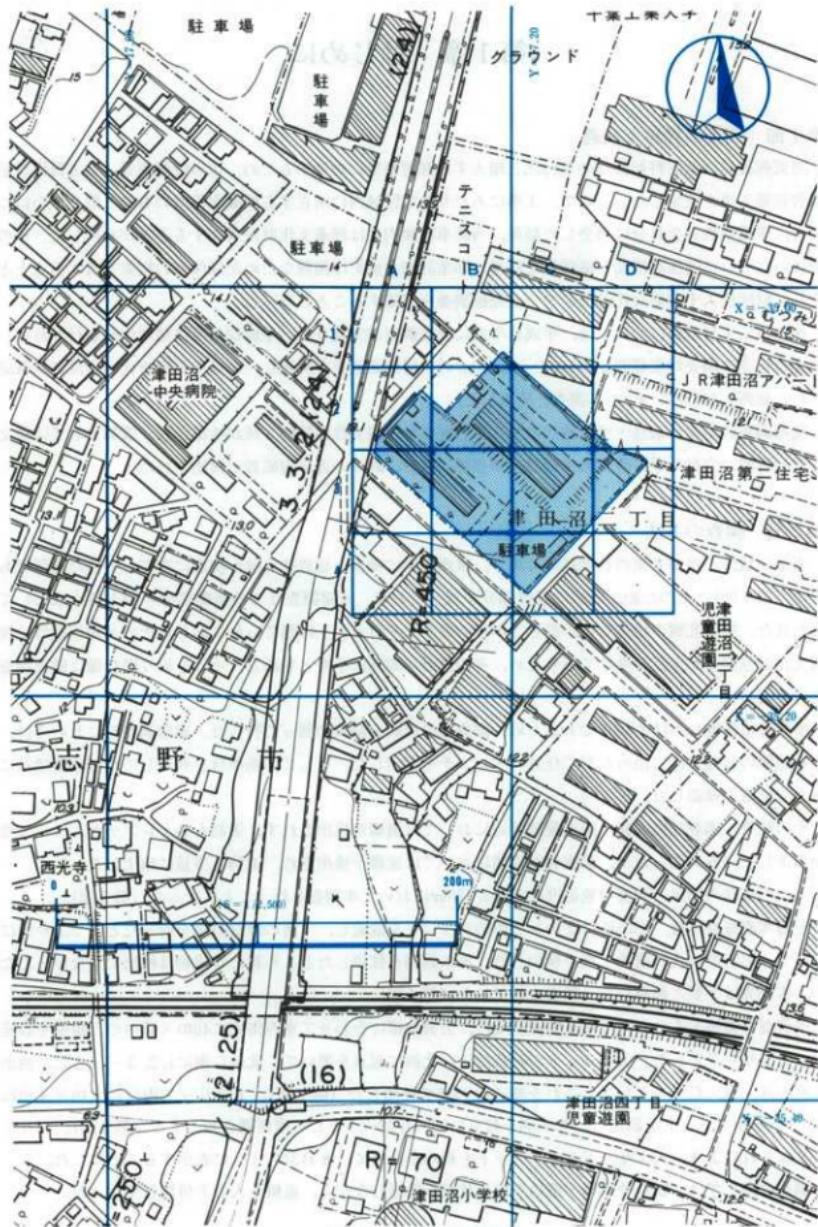
その結果、調査範囲北側、攪乱範囲周辺においては遺構が検出されず、遺物も各トレンチから1～2点が出土したのみであったが、調査範囲南側においては遺構が検出され、遺物も多量に出土した。

以上の確認の結果、調査対象範囲の南側3,420m<sup>2</sup>において本調査を行うことになった（第3図）。

上層本調査終了後、62か所に2m×2mのグリッドを設定し、下層の確認調査を行ったところ1か所において、旧石器時代の遺物1点を検出した。その周囲を拡張したところ新たな遺物は検出できなかったため、本調査は不要と判断して、調査を終了した（第4図）。

本調査を実施するにあたり対象範囲全域に、公共座標に合わせて東西南北に40m×40mの方眼網を設定し、大グリッドとした。大グリッドの呼称法は、北西に起点を置いて、北から南に1, 2, 3……とし、西から東へA, B, C……として、これを組み合わせて使用した（第1図）。大グリッド内には4m×4mに100分割の小グリッドを設定し、北西隅を起点に00, 01, 02……として南西隅を99とする（第2図）。グリッド名はこれにより、大グリッドと小グリッドを組み合わせて、8B34のように表示することにした。

調査に際しては、安全や遺構・遺物の出土状況を考慮しながら、重機と人力を併用して行った。



第1図 調査区の位置

00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
10	11								
20	22								
30		33							
40			44						
50				55					
60					66				
70						77			
80							88		
90								99	

第2図 小グリッド呼称例

物が検出され、周辺地域史の解明に貴重な資料を提供している<sup>3)</sup>。

以下、近年の成果に基づいて、時代別に周辺遺跡を概観することとする。

旧石器時代については、発掘調査例自体がいまだに少なく、その様相を的確に述べることは困難である。わずかに藤崎堀込貝塚<sup>4)</sup>において、立川ローム層Ⅲ層からⅣ層中より小規模なブロックが検出され、花咲新田台遺跡<sup>5)</sup>においては、剝片1点ではあるがⅣ層中から検出されている程度である。しかし、近隣地域における検出例も増えており、本遺跡周辺の台地上にも、包含地がある可能性は高い<sup>6)</sup>。

縄文時代の遺跡は、本遺跡北東の台地上に展開する藤崎堀込貝塚をはじめとして、点在する状況が窺える。前期以前では、藤崎塚<sup>7)</sup>から早期の撚糸文や条痕文の土器が検出され、花咲新田台遺跡においては、早期条痕文期の住居跡や炉穴が確認されている<sup>8)</sup>。また、藤崎三丁目南遺跡<sup>9)</sup>においては前期黒浜式の土器が検出されている。中期から後期にかけては藤崎堀込貝塚や藤崎三丁目南遺跡、新山東遺跡<sup>10)</sup>などが確認されている。

弥生時代の遺跡は、今のところ習志野市内では余り知られていない。しかし古墳時代前期においては、鷺沼1丁目遺跡群<sup>11)</sup>において竪穴住居跡が確認されている。後期に至っては、鷺沼古墳群<sup>12)</sup>、前原塚古墳、大日塚古墳、実櫻靈園遺跡における滑石の玉造り工房<sup>13)</sup>、谷津貝塚D地点<sup>14)</sup>における牛の下顎骨を伴う住居跡内貝層などが確認されている。この頃から、農耕社会が展開している様子を窺うことができる。

奈良・平安時代の遺跡は余り知られていないが、中世においては、石橋山の合戦で敗れ、上総に逃げた源頼朝が、再度挙兵したときに使ったとされる鷺沼御旅館（鷺沼城か？）の名が「吾妻鏡」に見られるよう古墳時代以降も着実に発展していったものと考えられる。

近世に至っては、小金五牧のうち下野牧として馬産が盛んに行われていた。この下野牧の存在が、近代にいたって、陸軍大演習を招くこととなる。この演習において、篠原陸軍少将の活躍を見た明治天皇睦仁による「習え篠原」の一言が、習志野市誕生の端緒となった（但し習志野命名の地は、現在船橋市に所在する）<sup>15)</sup>。

### 第3節 遺跡の位置と周辺の遺跡（第6・7図）

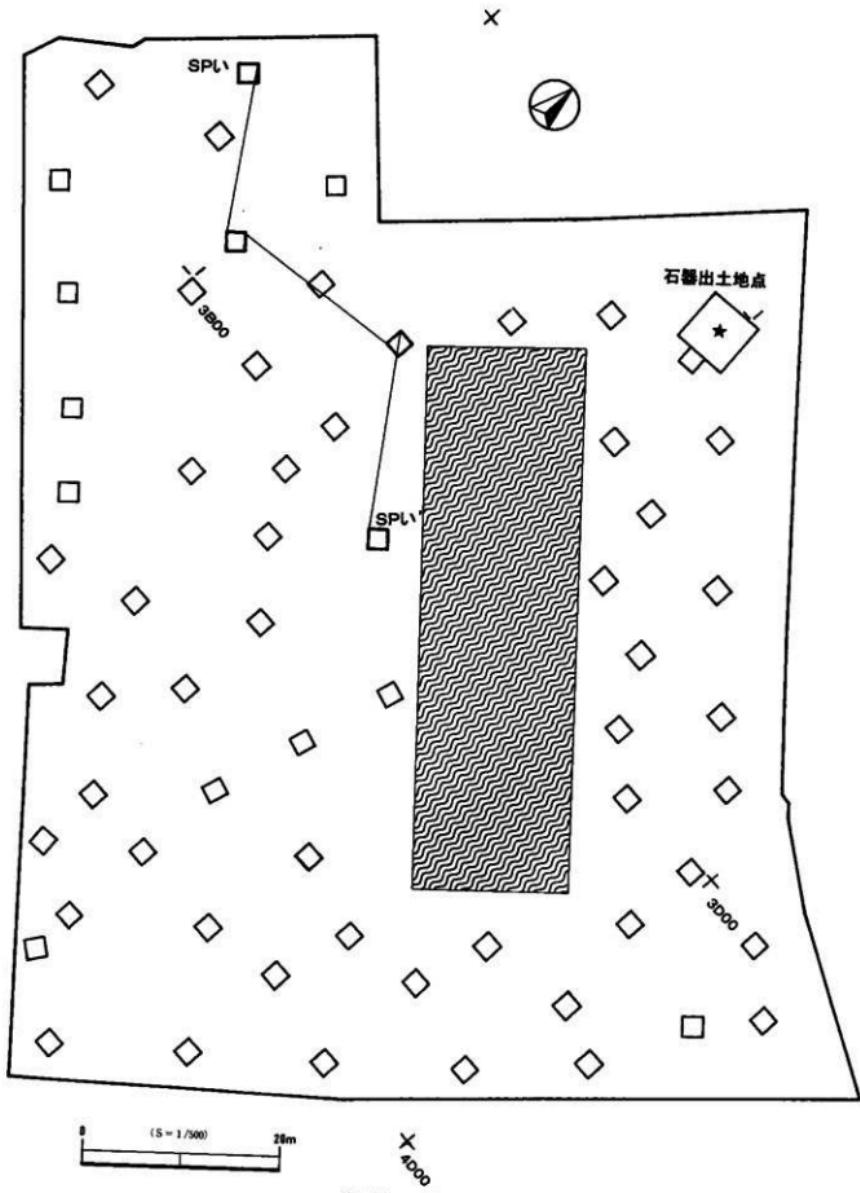
習志野二丁目遺跡は、習志野市津田沼二丁目1,846他に所在する（第6図）。その立地は、東京湾に向って南西方向に開口する小支谷の西岸の台地上縁辺部である（第7図）。

調査区は、すぐ南が傾斜面となる台地縁辺にあり、地形的には下位段丘面に相当する。調査区の標高は、12m程度である。

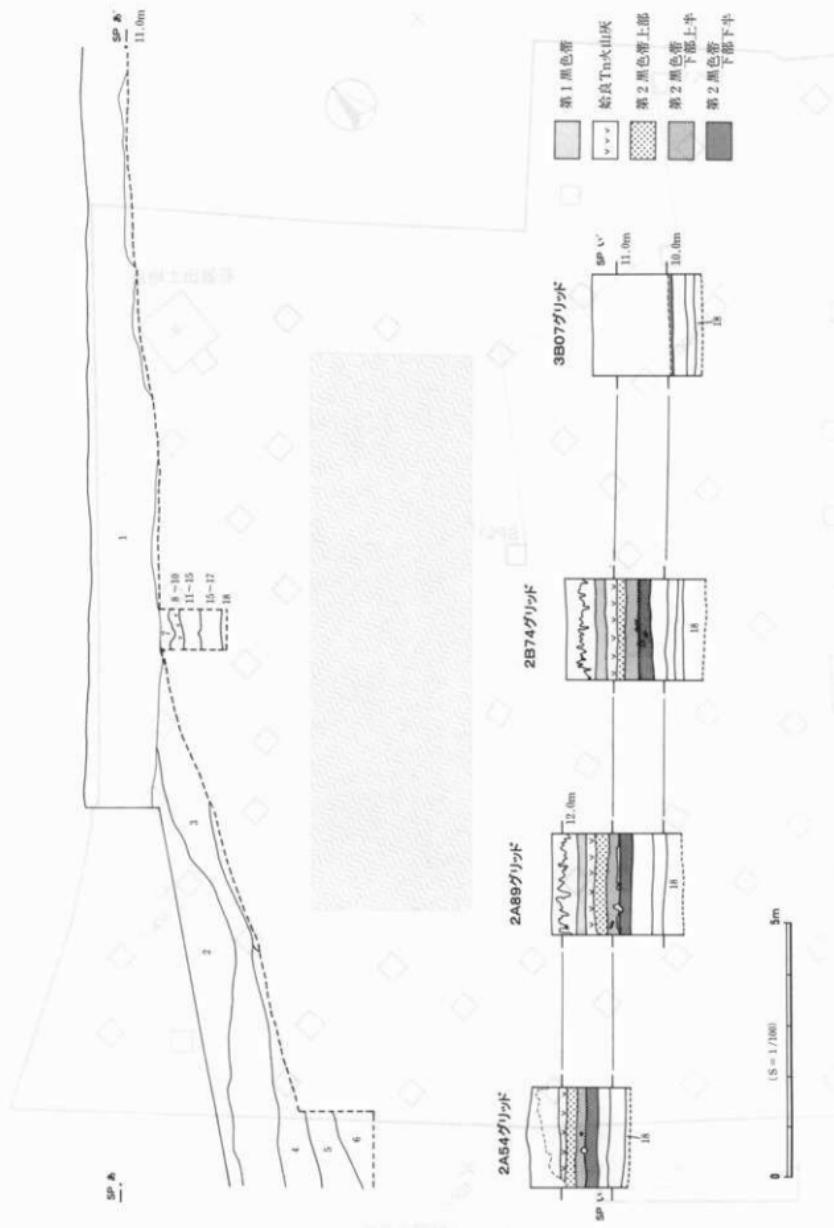
本遺跡周辺では、貝塚や古墳群が存在することが古くから知られているが<sup>1)</sup>、発掘による調査例は少ない<sup>2)</sup>。近年に至って、本遺跡の南西側の谷津貝塚遺跡において平成9年度から習志野市教育委員会によって台地縁辺の調査が行われ、古墳時代から平安時代にまたがる数多くの遺構・遺物が検出され、周辺地域史の解明に貴重な資料を提供している<sup>3)</sup>。



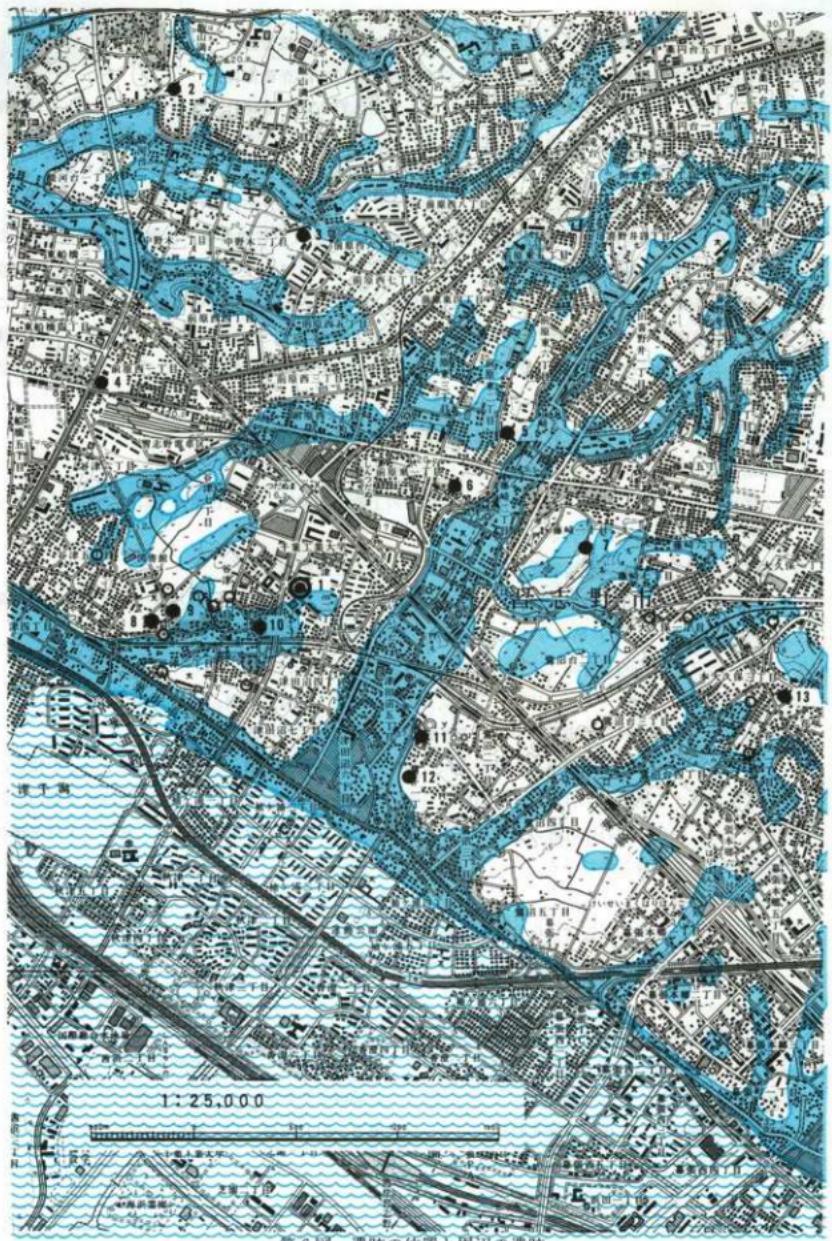
第3図 上層調査範囲



第4図 下層調査範囲



第5図 基本土層図

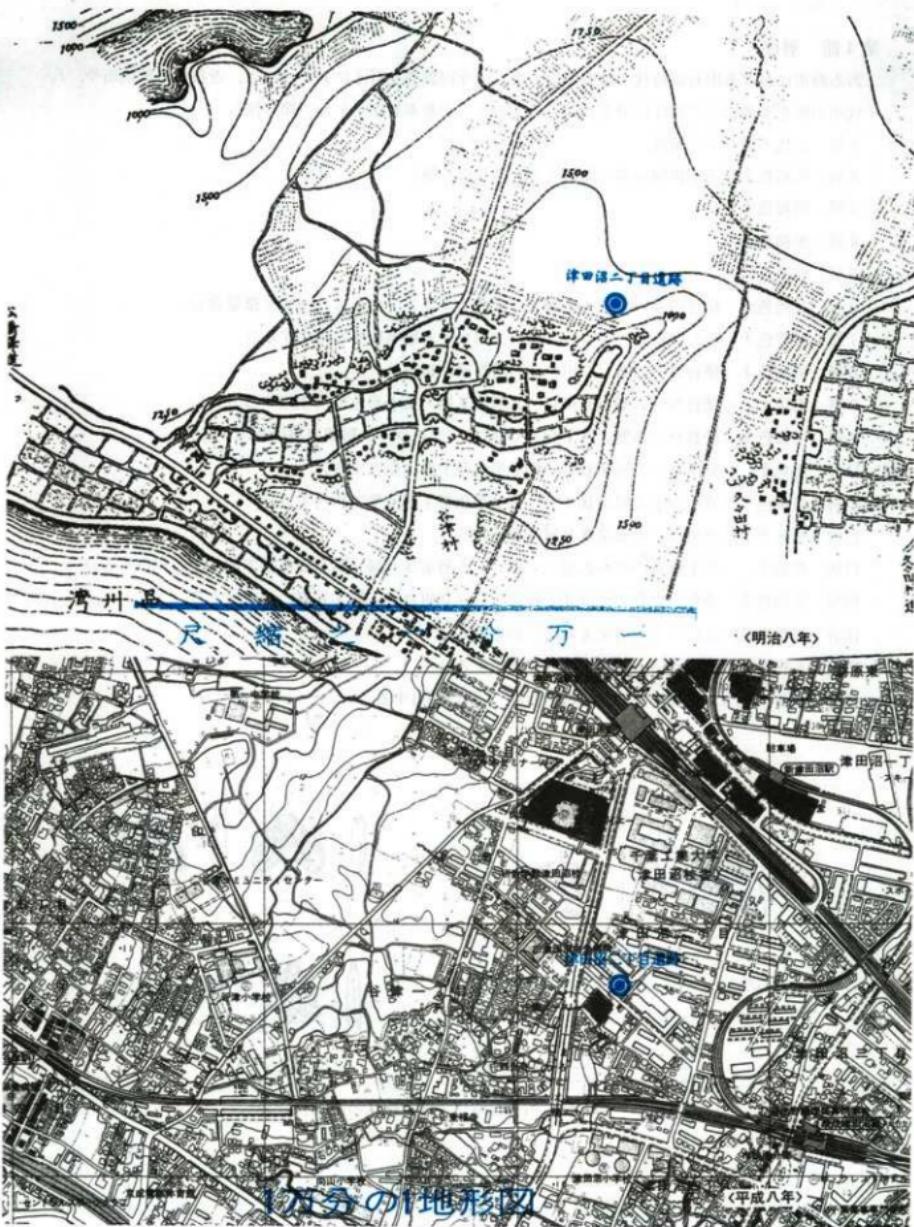


第6図 遺跡の位置と周辺の遺跡

- 注 1 千葉県教育庁文化課 1990『千葉県所在古墳群詳細分布調査報告書』  
 千葉県教育庁文化課 1983『千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書』
- 1970年代に、千葉工業大学考古学愛好会によって習志野市内の遺跡分布調査が行われているが、惜しむらくは、その成果は、孔版による会報であったため、現在目にすることが困難な状況を呈している。
- 2 藤崎堀込貝塚と鷺沼古墳群については、習志野市による学術調査が行われ、成果をあげている。
- 3 「千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書」において報告された谷津貝塚・谷津北貝塚の所在地「谷津町六丁目」はその後地番変更を受け、現在「谷津一丁目」となっており、「谷津貝塚」として現在の分布図に記載された場所ではない。谷津北貝塚は、近接する西光寺周辺の台地縁辺部にあたり、こちらでは現在もハマグリ・シオワキ等が地表に露出している。また、谷津貝塚についても、この谷津北貝塚から谷を挟んで南に150m程離れた地点における微高地で、現在墓地となっている場所の周辺と思われるが、詳細は不明。
- 4 金子浩昌ほか 1977『習志野市藤崎堀込貝塚』 習志野市教育委員会
- 5 鍛冶文博ほか 1997『花咲新田台遺跡』 習志野市教育委員会
- 6 千葉市北西部の武石遺跡・玄番所遺跡、船橋市の上般山間遺跡・夏見台遺跡等において、小プロックながら石器群の出土が報告されている。
- 7 新井和之ほか 1992『藤崎発掘調査報告書』 習志野市教育委員会
- 8 有舌尖頭器が陸上自衛隊の演習場で表採されたらしいが、詳細は不明。新井徹 1972『習志野市発見の有舌尖頭器』『ふさ』第2号（陸上自衛隊の演習場は、八千代市内に所在する。）
- 9 小川和博ほか 1995『藤崎3丁目南遺跡』 習志野市教育委員会
- 10 財）千葉県文化財センター 1999『千葉県文化財センターワークス』 No.24
- 11 堀部昭夫 1969『習志野市鷺沼1丁目遺跡調査略報』 習志野市教育委員会
- 12 尾崎喜左雄 1967『習志野市文化財調査報告書 第1輯 鷺沼古墳』 習志野教育会 この報告において、近接する鷺沼二丁目の習志野消防署（現 習志野市庁舎第二分室）から古墳時代後期の土器が採集され、その時代の住居跡の存在が予想されている。この地点は、遺跡台帳に鷺沼1丁目遺跡群の範囲内として記載されている。
- 13 現地説明会資料
- 14 白石 浩ほか 2000『谷津貝塚D地点発掘調査報告書』 習志野市教育委員会
- 15 習志野市教育委員会 1990『習志野—その今と昔』 習志野市役所

#### 「第6図 遺跡の位置と周辺の遺跡」番号対応遺跡名

- |                    |          |            |               |
|--------------------|----------|------------|---------------|
| 1 津田沼二丁目遺跡         | 2 大日塚古墳  | 3 新山東遺跡    | 4 前原塚古墳       |
| 5 藤崎三丁目南遺跡         | 6 藤崎塚    | 7 藤崎堀込貝塚   | 8 谷津貝塚D地点     |
| 9 谷津貝塚A地点          | 10 谷津北貝塚 | 11 鷺沼一町目遺跡 | 12 鷺沼古墳群・鷺沼城跡 |
| 13 花咲新田台遺跡         |          |            |               |
| ○ 千葉工業大学考古学愛好会紹介貝塚 |          |            |               |

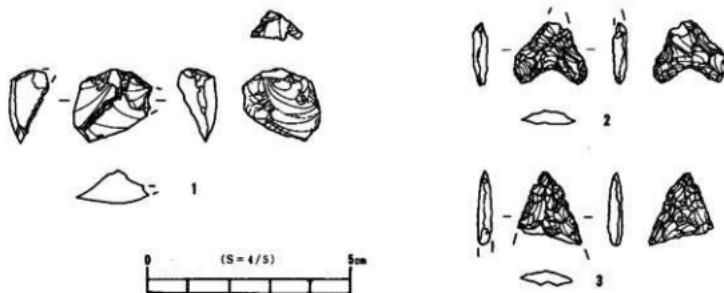


第7図 遺跡周辺の状況

#### 第4節 層序

習志野市における旧石器時代の調査例は少なく、今回調査を行うにあたっては、近接する船橋市や、八千代市の例を参考にして層序区分を行い、以下のような基本層序とした（第5図）。

- 1層 近代の盛り土・擾乱
- 2層 灰褐色土 （近世陶磁器・泥面等を多く含む層）
- 3層 暗褐色土
- 4層 黒褐色土
- 5層 暗褐色
- 6層 黄褐色土 粘性の強いローム土壤で、赤色スコリア・白色スコリアを微量含む。
- 7層 黄褐色土 いわゆるソフトローム層（立川ローム層第III層に相当する。）
- 8層 明褐色土 硬質ローム層（立川ローム層IV層に相当。）
- 9層 褐色土 硬質ローム層（立川ローム層第V層・第1黒色帯に相当する。）
- 10層 明褐色土 硬質ローム層。A.Tを多く含む。（立川ローム層第VI層に相当する。）
- 11層 褐色土 （立川ローム層第VII層・第2黒色帶上部に相当する。）
- 12層 暗褐色土 （立川ローム層第IX a層・第2黒色帶下部上半に相当する。）
- 13層 褐色土 （立川ローム層第IX b層に相当する。）
- 14層 褐色土 若干軟質のローム層（立川ローム層第IX c層・第2黒色帶下部下半に相当する。）
- 15層 茶褐色土 赤色・黒色のスコリア粒を含む（立川ローム層X a層に相当する。）
- 16層 暗茶褐色（立川ローム層X b層に相当する。）
- 17層 茶褐色土（立川ローム層X c層に相当する。）
- 18層 灰黄褐色土 粘性が強い。（武藏野ローム層に相当する。）



第8図 旧石器時代・縄文時代の遺物

## 第2章 検出した遺構と遺物

### 第1節 旧石器時代

#### 1 概要

調査範囲の北端部において、旧石器時代の石器出土地点1か所が確認された。検出された遺物は1点であるが、調査範囲外に広がる可能性が指摘できる。

#### 2 遺構と遺物（第4・8図、図版7）

石器出土地点は2B99グリッドで、剥片1点が、Ⅹ層中において確認された。

1は、厚みのある横長の剥片で、背面の後部に細かい剝離が施されており、調整剥片と思われる。石材は、頁岩である。

### 第2節 繩文時代

#### 1 概要

今回の調査で、石器が2点検出されたが、縄文時代の土器・遺構等は検出されなかった。

#### 2 グリッド出土遺物（第8図、図版7）

2は先端部を欠失した、基部にワタクリを施した石器であり、3は基部を欠失した石器である。何れも石材は、黒曜石である。

### 第3節 奈良・平安時代

#### 1 概要（第3図）

今回の調査は建造物の立替によるもので、基礎その他により立川ローム層最下部にまで及ぶ擾乱が至る所に存在していた。本調査範囲における土層にしても、ソフトローム面まで擾乱が及んでおり、検出された遺構は、ハードローム面まで掘りこまれていたものである。また、本調査区南東において、埋没谷が確認された。ローム上面において作成したコンタ図から、遺構群は、この谷に沿った形で分布している様子が読み取れる。

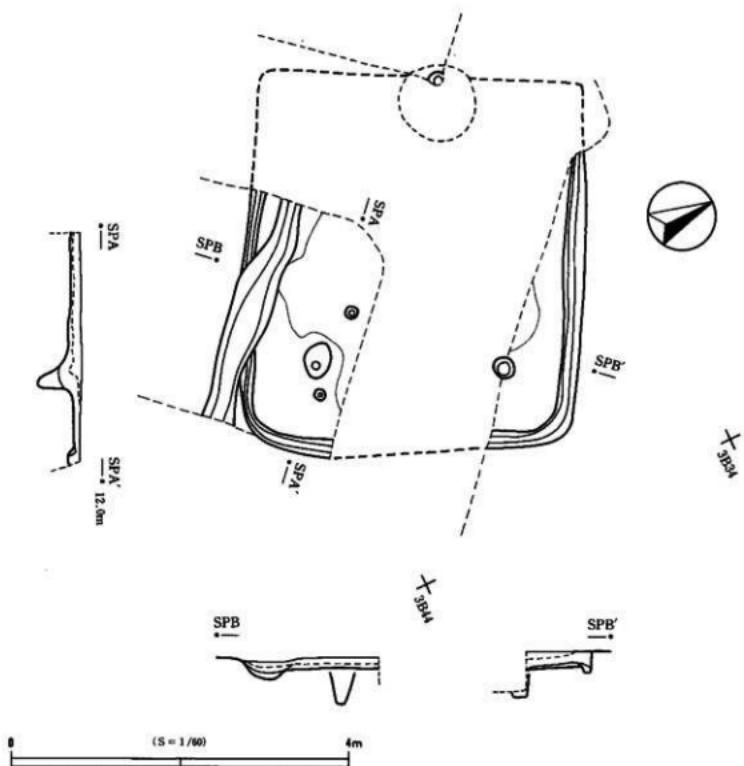
#### 2 遺構と遺物

##### （1） 竪穴住居跡と遺物

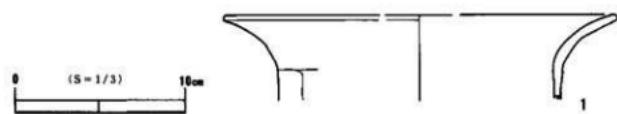
擾乱が多く、各遺構において、全容が明らかにならないことも少なくなかったが、奈良・平安時代の住居跡9軒を検出した。

#### S I -01号跡（第9・10図、図版3）

調査区中程で検出された住居跡である。遺構の大半が擾乱を受けている。平面形は正方形を呈すると思われるが、西辺のほぼ全てと東辺の一部を建造物の基礎によって破壊され、また南辺において、後世の溝



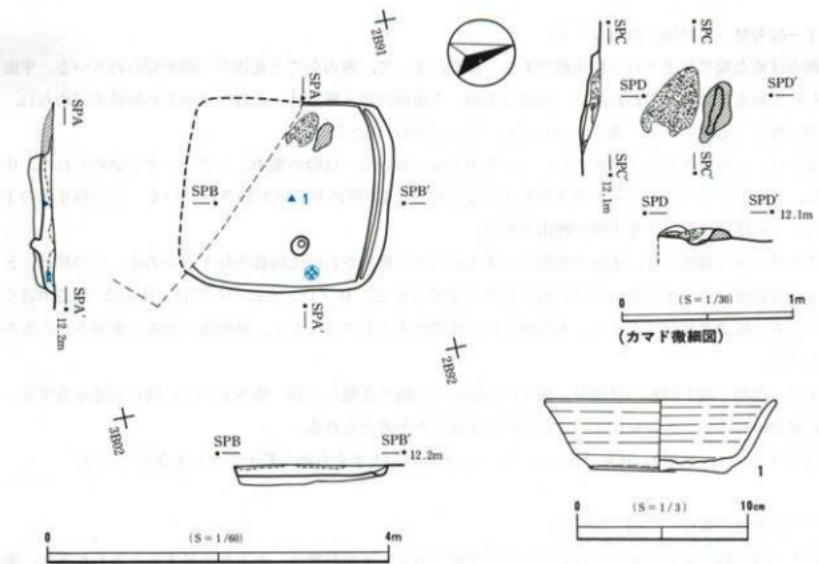
第9図 S I - 01号跡



第10図 S I - 01号跡出土遺物

第1表 S I - 01号跡出土土器観察表

挿図番号	材質	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	調整	造存度	焼成	備考
I	土師器	甕	(22, 6)	-	-	雲母・長石	明黄赤色	口縁横ナデ 底部横のヘラ削り	1 / 4	良	



第11図 S I - 02号跡と出土遺物

第2表 S I - 02号跡出土土器観察表

鉢形番号	材質	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	調 整	遺存度	焼成	備考
1	土師器	杯	13.2	4.3	7.8	雲母・長石	暗い黄赤	ロクロ 底部回転ヘラ削り	3 / 4	良	

第3表 S I - 02号跡出土貝殻集計表

種名	6mm以上			6mm以下			合計	比率							
	右 個数	左 個数	破片 g	右 個数	左 個数	破片 g									
ハマグリ	6	29.00	5	16.42	20	26.31	ハマグリ	0	0.00	0	0.00	175	6.52	78.25	82.14%
シオフキ	0	0.00	0	0.00	0	0.00	シオフキ	0	0.00	0	0.00	199	11.99	11.99	12.59%
アサリ	0	0.00	0	0.00	0	0.00	アサリ	0	0.00	0	0.00	2	0.31	0.31	0.33%
不明	0	0.00	0	0.00	0	0.00	不明	0	0.00	0	0.00	292	4.71	4.71	4.94%
合 計	6	29.00	5	16.42	20	26.31	合 計	0	0.00	0	0.00	668	23.53	95.26	

が掘り込まれていることなどから詳細は不明である。本遺構に伴う施設は、東辺際の床面に深さ0.4m程の柱穴2基と、深さ0.1m程の小ピット2基が認められ、わずかに残った西辺に山砂・焼土の集中する部分が存在し、カマドの痕跡と思われる。また、住居跡中央の柱穴間には硬化面の一部が残る。

覆土の堆積土には、一部は床面近くまで搅乱が及んでいるが、全体的には、細かいロームブロックを含んだ暗褐色土で覆われている。周溝には固く締まった暗黃褐色土が、柱穴内には、暗褐色土が堆積している。柱穴内の覆土は、住居跡全体の覆土に類似しており、柱の抜き取りが行われているものと考えられる。

本遺構に伴う遺物には、覆土中より検出した土師器の甕1点がある。

1は、胴部に縦方向のヘラ削りが施され、口縁が大きく外反しており、武藏型の甕と考えられる。

### S I -02号跡（第11図、図版3・7）

調査区東北端で検出された住居跡である。搅乱によって、西辺全てと北辺の一部が切られている。平面形が正方形を呈すると思われるが、詳細は不明。本遺構に伴う施設は、北辺にカマドの痕跡が認められ、南辺に梯子穴と思われる、深さ0.1mの小ピットが認められた。

覆土は、全体を暗褐色土で覆われ、この覆土上面において、貝殻の集中したブロックが認められた。床面は、ロームブロックを含んだ暗黄褐色土による厚さ0.1m程の貼り床が施されている。この貼り床の下から、本住居跡に先行する土坑が検出された。

本遺構に伴う遺物には、正位の状態で、床面直上から検出された土師器の杯1点がある。この杯は、S I -01号跡覆土中出土遺物との間に接合関係が認められる。貝ブロックについては、床面より0.2m近く高い位置で確認されたことから、本住居跡に直接関係するものではなく、廃絶後の窪みに廃棄されたものであろう。

1は、体部下端を回転ヘラ削り、底部にも回転ヘラ削りを施した杯。焼きが良く、硬い質感を有する。南武藏型における、8世紀後半の須恵器杯を模倣したと考えられる。

貝ブロックは、総量95.26gで、ハマグリ・シオフキが大半を占め、若干アサリを含んでいる。

### S I -03号跡（第12・13図、図版3）

S I -01号跡の南東約8mで確認された住居跡である。平面形態は、正方形を呈すると思われるが、南辺と、東・西辺の一部が、搅乱によって破壊されている。本遺構に伴う施設は、床面の壁際ほぼ全周を巡ると推定される周溝と、深さ0.3mほどの柱穴が四隅に認められる。また、東辺中程に深さ0.2mほどの梯子穴、西辺中程にカマドが認められた。また、床面において、4本の柱穴で囲まれた範囲に硬化面が認められた。

検出されたカマドは、煙道と天井の一部が残存している。燃焼部の床面に厚く焼土が堆積し、その上面に灰や焼土を多く含んだ土塊が煙道内に充满する様に堆積している。頻繁に炊事を行っていた当時の状況が窺える。

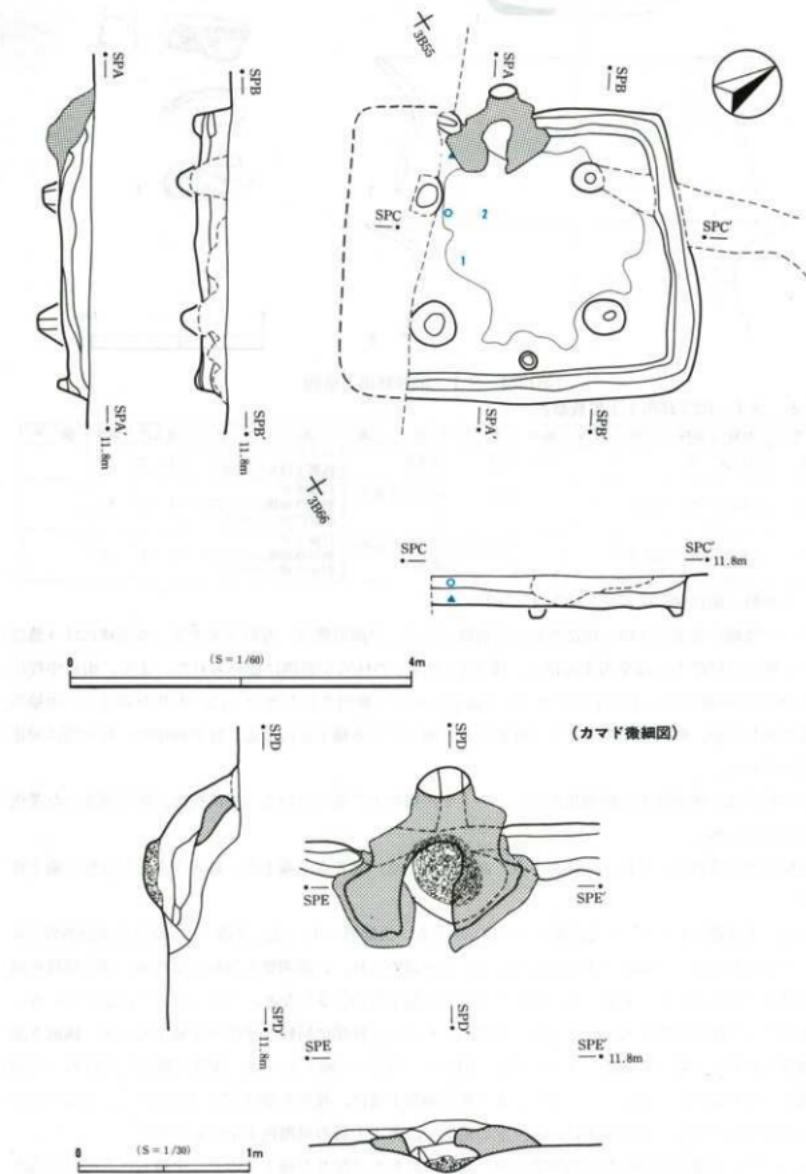
覆土は、東方から黒褐色の土が流れ込んで床面の一部を覆っているほかは褐色系の土壤である。周溝は、固く締まった明褐色土が認められる。柱穴は、柱の周りを、ロームブロックを含む褐色土で埋めている。本遺構に伴う遺物として、須恵器の杯1点が床面から0.2m程浮いた状態で検出され、土師器の甕1点がカマド脇の床面直上で、同じく土師器の甕と、鉄滓1点を覆土中から検出した。また、図示はしていないが、覆土中から検出した土師器の甕において、S I -05号跡と接合関係が認められた。

1は、白色針状物を含み、綾い感じのする器面を呈しており、常陸産の須恵器杯と思われる。体部下端部に煤が附着している。2・3は、胴部に横方向のヘラ削りが施され、大きく口縁が外反しており、武藏型の甕と思われる。4は、鉄滓で、炉内滓と思われる。

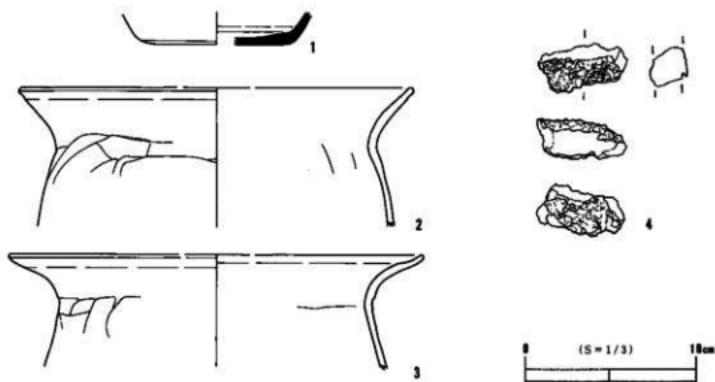
### S I -04号跡（第14図、図版4）

S I -01号跡の東約2mで検出された住居跡である。平面形態は正方形を呈すると思われるが、床面まで搅乱によって破壊され、確認面からの深さが0.2m程の柱穴3本だけが認められたものである。

本遺構に伴う遺物は、検出されなかった。



第12図 S I - 03号跡



第13図 S I - 03号跡出土土器遺物

第4表 S I - 03号跡出土土器観察表

押印番号	材質	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	調 整	遺存度	焼成	備 考
1	須恵器	杯	-	-	9.16	墨母	灰黃色	ロクロ 底部手持ちヘラ削り	1/3	稍	
2	土師器	甕	(23.0)	-	-	墨母	明るい灰黃色	口縁ナデ 胴部外面横のヘラ削り 胴部内面ヘラナデ	1/4	稍	
3	土師器	甕	(24.4)	-	-	墨母・長石	くすんだ赤みの 黄色	口縁ナデ 胴部外面横のヘラ削り 胴部内面ヘラナデ	1/4	良	

#### S I - 05号跡（第15図～第17図、図版4・7）

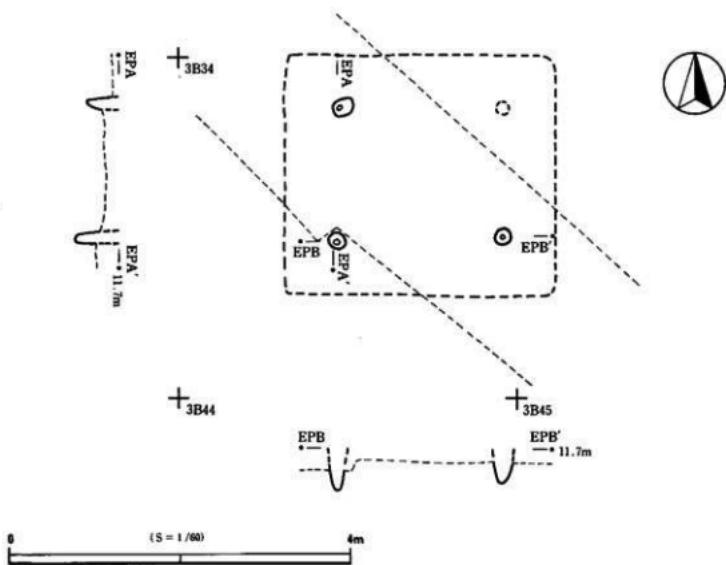
S I - 03号跡の北東約4mで確認された住居跡である。平面形態は、方形を呈する。本遺構に伴う施設として、床面の壁際をほぼ全周する溝と、深さ0.1mほどの柱穴が四隅に認められた。また、南辺中程に深さ0.1mほどの梯子穴、北辺中程にカマドが認められた。検出されたカマドは、天井が陥没し、両袖の一部を検出したが、壁の一部を加工して煙道を造り出している様子が伺える。住居跡中央、柱穴間に硬化面が認められた。

覆土の堆積は、床面直上が暗褐色土で、その上を黒褐色土で覆っている。周溝内は、固く締まった黄褐色土が認められる。

本遺構に伴う遺物は、杯16点、杯蓋1点、高台付椀1点、甕3点、壺1点、鉄滓5点と草食獣の歯と骨である。

杯には、土師器（1～7）と須恵器（8～12）がある。土師器の中には、墨書（2）や内面黒色処理（6・7）が施されたもの、高台を有するもの（7）等が認められ、底部調整も回転糸切り離し後に周縁を回転ヘラ削りするもの（1～3, 6）や、静止ヘラ削りを施すもの（5）など、バラエティーに富んでいる。体部下端にヘラ削りを施すもの（2～6）も認められるが、底部に回転ヘラ削りを施すものは、体部下端にも同様に回転ヘラ削りを施す（1～3, 6）、手持ちヘラ削りを施すものは、体部下端にも手持ちヘラ削りを施す（5）傾向が認められる。なお、1の外面部下端は、被熱を受けたように荒れて、表面が痘瘡状の剥離を呈している。出土位置は、カマドの前面で、覆土上層の黒褐色土中からである。

須恵器杯は、底部調整が回転糸切り離し後、周縁に回転ヘラ削りを施すものと、手持ちヘラ削りが施されたものがある。後者は、体部下端にも手持ちヘラ削りが施されている。胎土に白色針状物を多く含む8,



第14図 S I - 04号跡

11は南北企窓跡産、器面に柔らか味の有る9～11は常陸産、特に10・11は新治窯跡産と思われる。出土位置は、カマド内と、床面直上や覆土下層の暗褐色土中からである。

蓋(13)は土師器で、全面に朱塗りが施されている。ツマミは宝珠形を呈し、縁辺は、わずかながら屈曲する。

高台付椀(14)は、胸部がほぼ垂直に立ちあがり、口縁で僅かに外反する形態を呈する。9～11と同様の器面を呈しており、常陸産と思われる。

甕には、土師器(15)と須恵器(16・17)がある。土師器甕の底部には、木葉痕が残る。須恵器甕は、胸部を叩き絞めた後、下端をヘラで横方向に削っている。

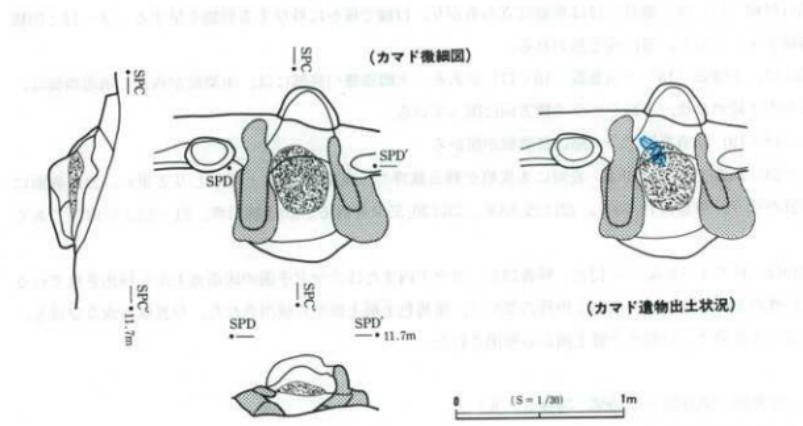
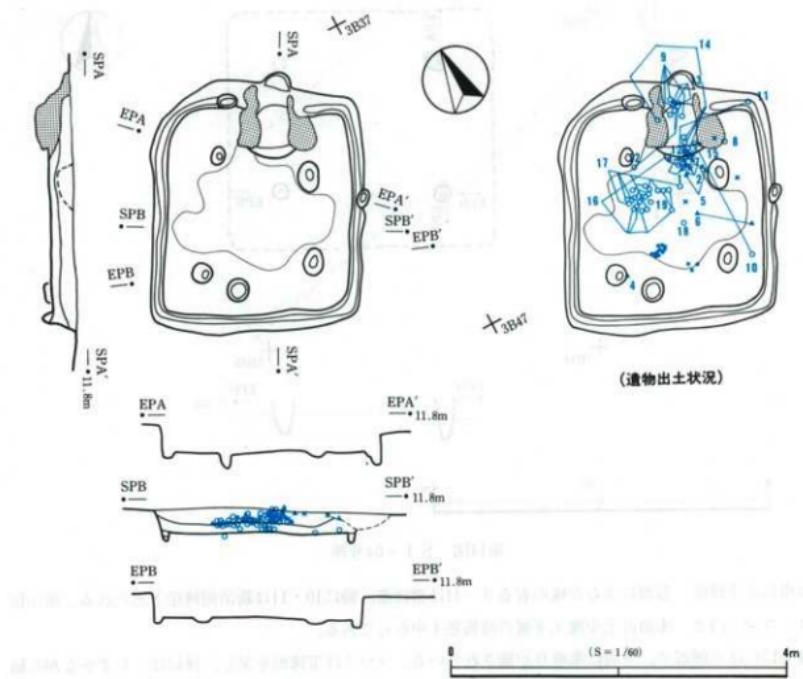
壺(18・19)は須恵器で、一部に自然釉が掛かる

20～23は鉄滓である。20は、表面に木炭痕が残る鉄滓で、重量は191gとずっしりと重い。21は裏面に木炭痕が残り、重量は72.69g、22は25.83g、23は30.55gを計る。20は楕円形、21～23は炉内津であろう。

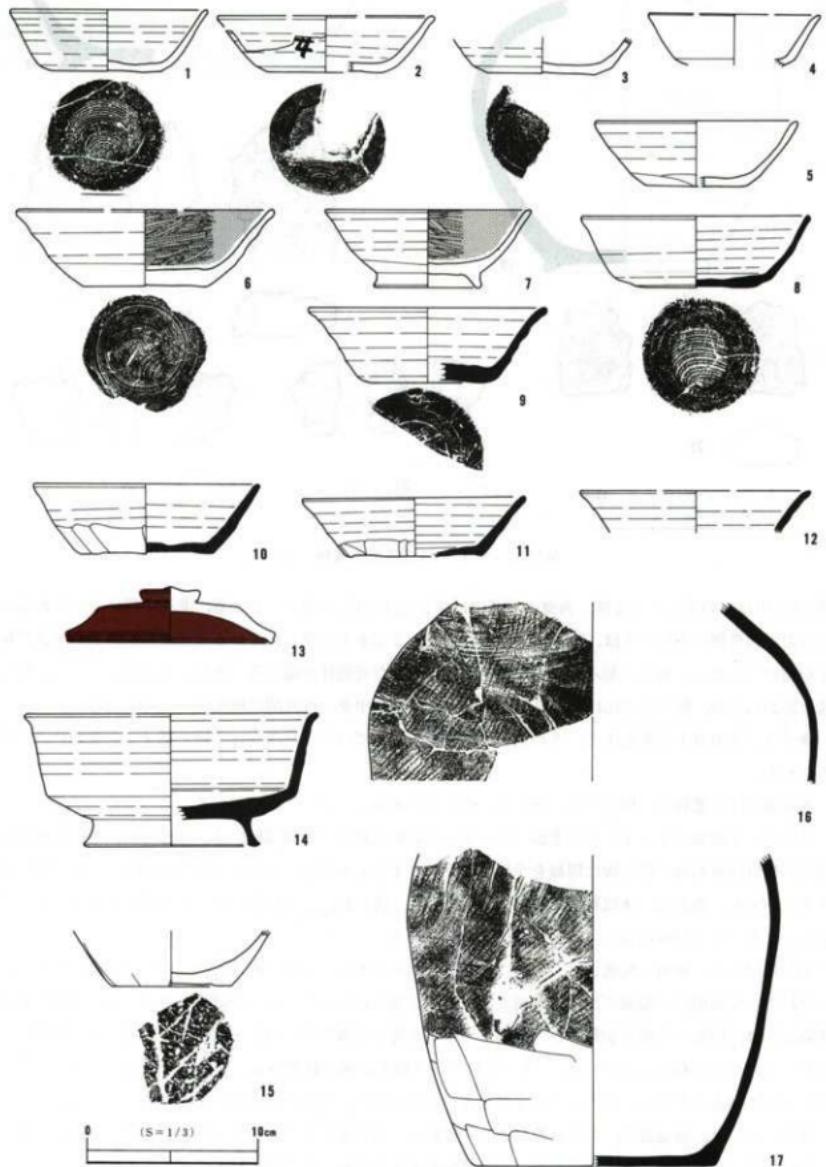
遺物は、杯の1～3、5、7～12と、杯蓋13が、カマド内またはカマド手前の床面直上から検出されている。それ以外の遺物は、カマド前方1m程の部分で、暗褐色土層上面から検出された。草食獣の歯及び骨も、南辺寄りの部分で、暗褐色土層上面から検出された。

#### S I - 06号跡 (第18図～第20図、図版5・8)

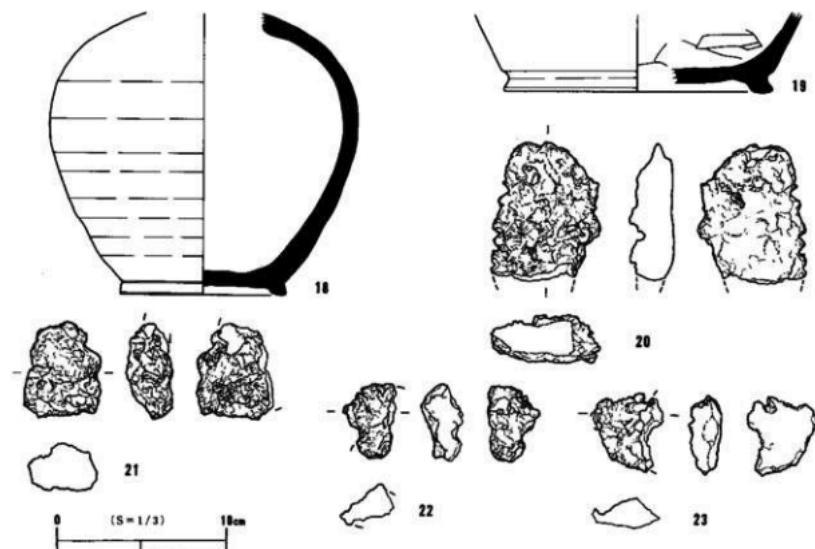
S I - 05号跡の東約4mで確認された住居跡である。平面形態は、正方形を呈する。本遺構に伴う施設として、床面の壁際は全周を廻る溝と、深さ0.1mほどの柱穴が四隅に認められる。また、南辺中程に



第15図 S I-05号跡



第16図 S I - 05号跡出土遺物（1）



第17図 S I - 05号跡出土遺物（2）

深さ0.1mほどの小ビット2基、西壁の周溝内に深さ0.2mほどの小ビット2基、北辺中程にカマドが認められた。南壁側の小ビットは、梯子穴と思われるが、2基並んで穿たれていることから組み合わせ式の梯子が使用されたか、丸太に刻みをいれた梯子を移し換えた可能性が窺える。西壁2基の小ビットは、壁柱穴と思われるが、他の3辺には認められなかった。住居跡中央、柱穴間に硬化面が認められる。

覆土は、床面直上が褐色土で、その上を黒褐色土で覆っている。周溝内は、固く締まった黄褐色土が認められる。

本遺構に伴う遺物は、杯6点と、甕4点、瓶3点である。

杯には、土師器（1～4）と須恵器（5～6）が認められる。土師器杯には、体部外面に墨書きが施され、底部調整は回転糸切り離し後に周縁を手持ちヘラ削りするもの（1・2）や、回転ヘラ削りを施すもの（3・4）がある。墨書きは、体部外面に、正面で「十万」と書かれ、この他に「生」も書かれたもの（2）もある。また、4の口縁内外に、煤が帯状に付着している。

須恵器杯には、線刻（焼成後に、器面に文字等を刻んだもの）が施されたもの（5）と、高台を有し、ヘラ描き（焼成前に、器面に文字等を刻んだもの）が施されたもの（6）が認められる。5の底部と胴部下端部には、回転ヘラ削りが施され、線刻は、墨書きと違って横位で「万」と刻まれている。6の底部は、回転ヘラ削り後に高台が付けられ、「T」字状のヘラ描きが施されている。5・6は表面がザラつき、黒色を呈していることから、かつて「くすべ土器」と呼ばれた、下総産須恵器と思われる。

杯蓋（7）は、須恵器で、ロクロ整形され、回転ヘラ切り離し後に、縫みを取り付けている。縫は僅かに屈曲する。色調は赤味を帯びており、還元焼成が不十分であったと思われる。

甕には、土師器（8～9）と須恵器（10～11）がある。土師器甕の胴部は、上半に縦方向の、下半に横

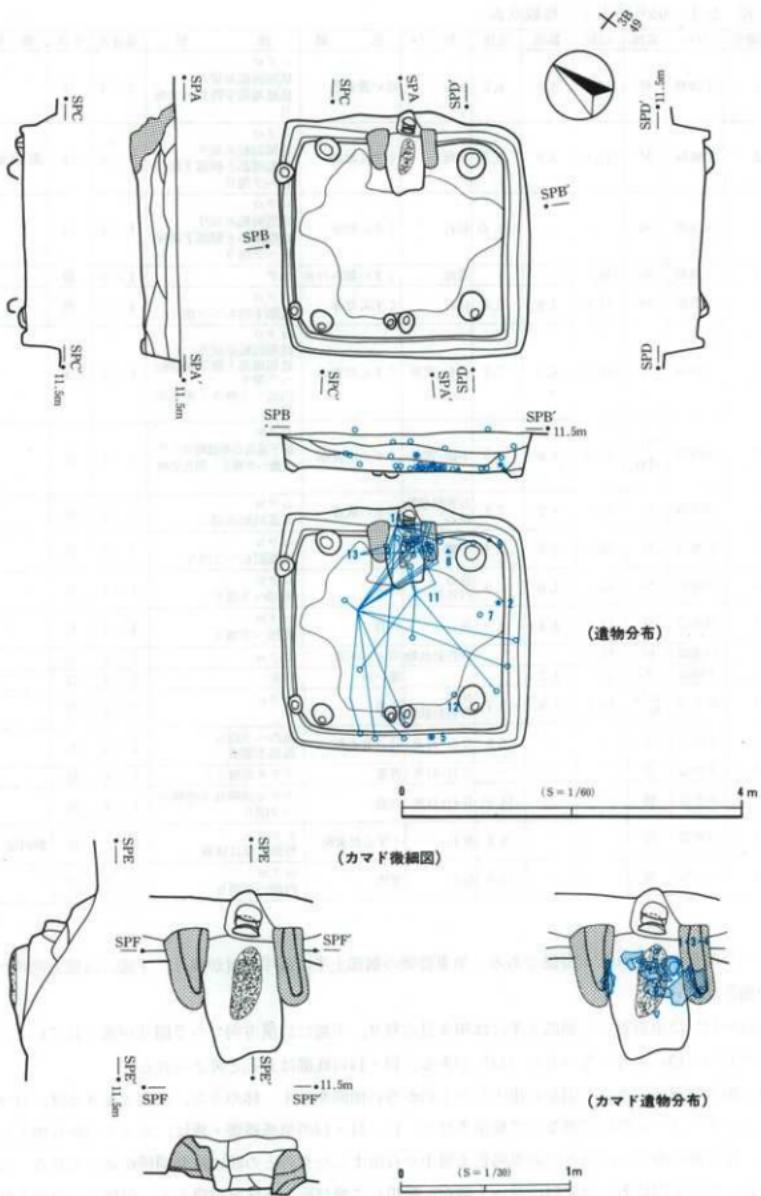
第5表 S I - 05号跡出土土器観察表

揮出番号	材質	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	調整	遺存度	焼成	備考
1	土師器	杯	12.0	4.0	6.0	長石	暗い黄赤色	ロクロ 底部回転糸切り 底部端部手持ちヘラ削り	3/4	良	
2	土師器	杯	(12.6)	3.0	6.3	雲母	くすんだ赤	ロクロ 底部回転糸切り 底部端部と副部下端回転ヘラ削り	1/2	良	墨書「女」
3	土師器	杯	—	—	(6.4)	長石	くすんだ赤	ロクロ 底部回転糸切り 底部端部と副部下端回転ヘラ削り	1/4	良	
4	土師器	杯	(10.0)	—	—	雲母	うすい紫みの赤	ナデ	1/4	稍	
5	土師器	杯	11.8	3.9	5.8	長石	くすんだ赤	ロクロ 底部手持ちヘラ削り	1/2	稍	
6	土師器	杯	(14.8)	4.5	7.2	長石・雲母	くすんだ黄赤	ロクロ 底部回転糸切り 底部端部と副部下端回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き・黒色処理	1/2	良	
7	土師器	高台付杯	12.0	4.6	6.0	小礫・雲母	くすんだ黄赤	ロクロ 副部下端高台接続時のナデ 内面ヘラ磨き・黒色処理	3/4	良	
8	須恵器	杯	13.4	4.2	7.2	白色針状物 長石	明るい灰青	ロクロ 底部回転糸切り	1/1	良	
9	須恵器	杯	13.6	4.4	7.4	小礫	灰色	ロクロ 底部回転ヘラ削り	3/4	良	
10	須恵器	杯	13.4	4.0	7.9	長石 白雲母	灰黄	ロクロ 底部ヘラ削り	1/1	良	
11	須恵器	杯	13.0	3.4	8.0	長石	灰青	ロクロ 底部ヘラ削り	3/4	良	
12	須恵器	杯	(13.0)	—	—	白色針状物	明るい灰青	ロクロ	—	1/4	良
13	土師器	甕	12.3	3.2	—	—	透い赤	赤彩	3/4	良	
14	須恵器	台付瓶	16.9	7.8	9.7	長石 白色針状物	灰黄	ロクロ	3/4	良	
15	土師器	甕	—	—	6.9	長石・石英	暗い黄赤色	横のヘラ削り 底部木葉模	1/3	良	
16	須恵器	甕	—	—	—	長石・石英	青墨	タスキ後横ナデ	1/4	良	
17	須恵器	甕	—	—	(14.2)	長石・石英	青墨	タスキ後副部下端横の ヘラ削り	1/4	良	
18	須恵器	甕	—	—	9.8	長石	くすんだ黄灰	ロクロ 外面一部に灰粒	1/2	良	静岡産
19	須恵器	甕	—	—	15.6	長石	青灰	ロクロ 内面ヘラ削り	1/4	良	

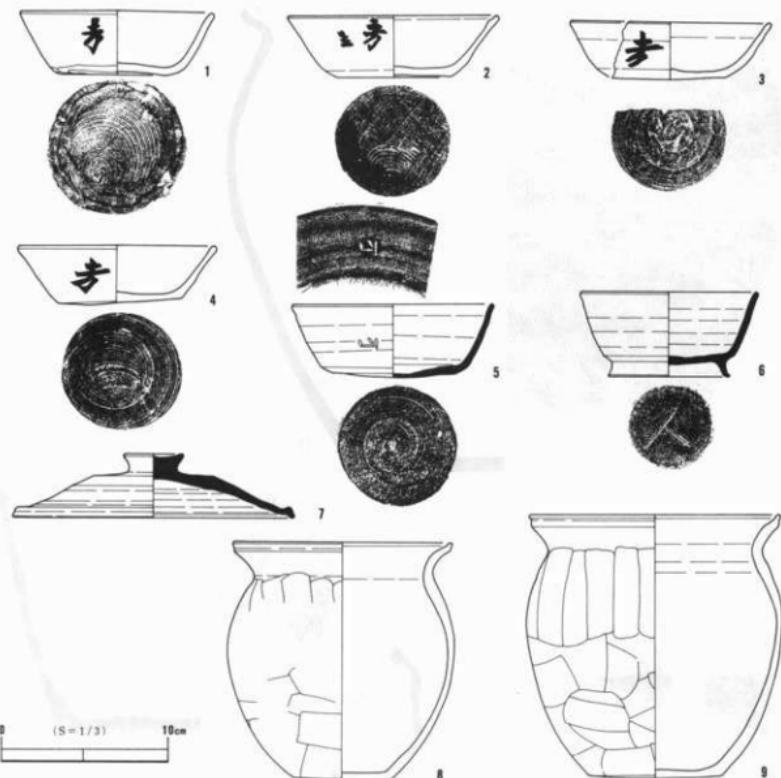
方向のヘラ削りが施された小型甕である。須恵器甕の胴部上半には叩き目が残り、下端には横方向のヘラ削りが施されている。

瓶(12~14)は須恵器で、胴部上半には叩き目が残り、下端には横方向のヘラ削りが施されている。把手をもつもの(13)ともたないもの(14)がある。13・14の底部は五孔と考えられる。

遺物の出土状況は、カマド内から出土したものが多い傾向を示す。杯のうち、墨書き土器3点は、カマド内に下から4・3・1の順で重なって検出された。10・11・14の須恵器甕・瓶は、カマド内から出土したものと、住居跡の南辺・西辺近くの黒褐色土層中から出土したものとの間に接合関係が認められる。このことから、カマド内にあった完形に近い土器が、破損して飛び散った状況が窺える。同様に、カマド外から検出された2の墨書き土器や5の線刻土器についても、もともとカマド内において、4・3・1の三重杯



第18図 S I - 06号跡



第19図 S I - 06号跡出土遺物（1）

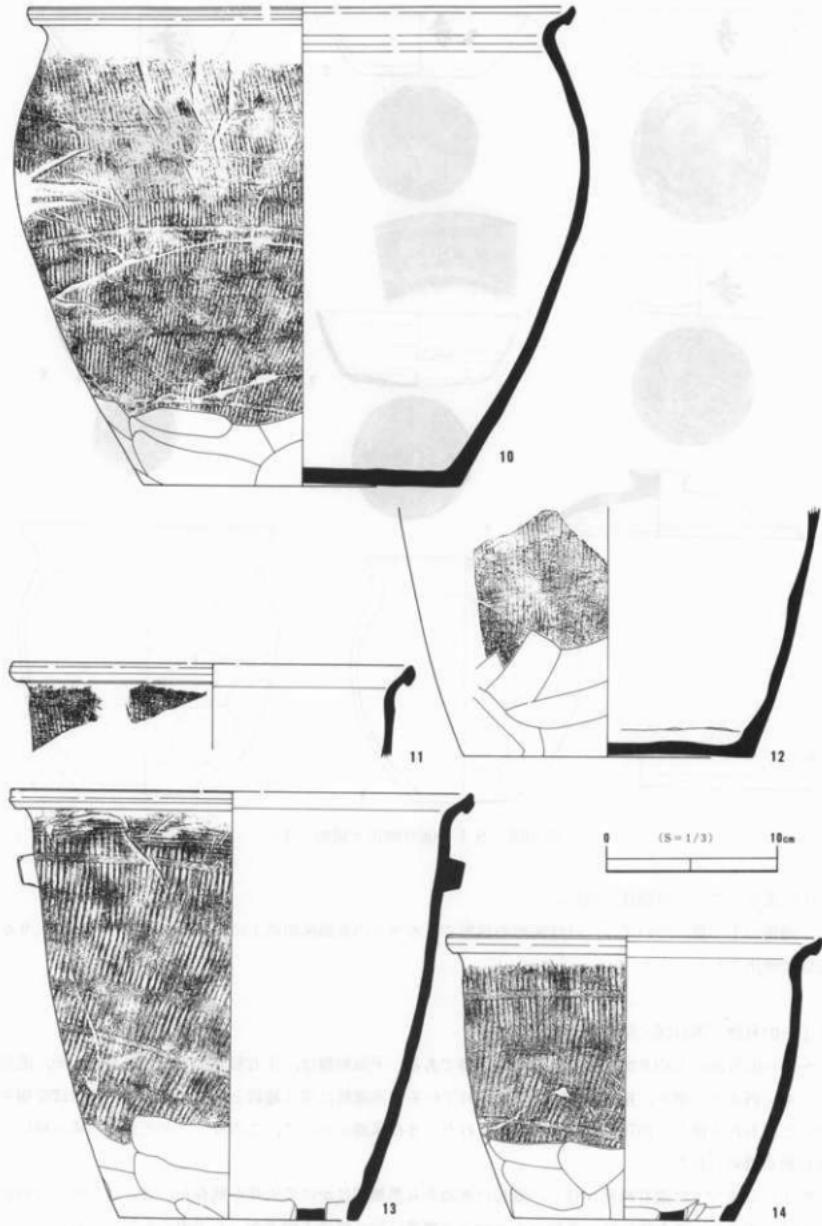
の上に重なっていた可能性が高い。

土師器の小型甕については、ほぼ完形の状態で、カマドの東脇床面直上に柱穴を挟んで8が倒位、9が正位で検出された。

#### S I - 07号跡（第21図・第22図、図版5・8）

S I - 06号跡の北約2mで確認された住居跡である。平面形態は、正方形を呈すると思われるが、北辺と、東・西辺の一部が、搅乱によって破壊されている。本遺構に伴う施設として、床面の壁際ほぼ全周を廻ると思われる溝と、西辺にカマドが認められた。また床面において、このカマドの正面から東辺側に、硬化面が認められた。

検出したカマドは遺存状態が良く、細長い煙道から燃焼部にかけて天井が残存し、焚き口、掛け口の痕跡も確認出来た。また住居跡の北壁からカマドの煙道に沿う様に1段下がった平坦面が認められた。この



第20図 S I - 06号跡出土遺物（2）

第6表 S I - 06号跡出土土器観察表

標団番号	材質	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	調整	進存度	焼成	備考
1	土師器	杯	11.4	3.9	7.1	雲母	くすんだ黄赤	ロクロ 底部回転糸切り 底部端部手持ちヘラ削り	1/1	良	墨書「十万」
2	土師器	杯	12.4	3.8	6.8	雲母	うすい紫みの赤	ロクロ 底部回転糸切り 底部端部手持ちヘラ削り	1/1	良	墨書「生十万」
3	土師器	杯	11.8	3.5	6.3	長石・石英	くすんだ黄赤	ナデ 底部回転ヘラ削り	3/4	良	墨書「十万」
4	土師器	杯	11.7	3.5	7.3	雲母	くすんだ黄赤	ロクロ 底部回転糸切り 底部端部回転ヘラ削り	1/1	良	墨書「十万」
5	須恵器	杯	11.8	4.3	7.3	長石・雲母	青墨	ロクロ 底部回転ヘラ削り 胴下端回転ヘラ削り	1/1	良	刻「万」
6	須恵器	高台付杯	10.4	5.1	7.2	長石 白色針状物	青墨	ロクロ 底部回転ヘラ削り	3/4	稍	ヘラ「T」
7	須恵器	甕	16.8	3.8	-	長石 白色針状物	暗い灰赤	ロクロ 頭部回転ヘラ削り	3/4	稍	
8	土師器	小型甕	12.3	14.2	5.8	長石	くすんだ黄赤	口縁ナデ 胴上半端ヘラ削り 胴下半横ヘラ削り	1/1	良	
9	土師器	小型甕	14.3	15.7	7.9	長石	暗い黄赤	口縁ナデ 胴上半端ヘラ削り 胴下半横ヘラ削り	1/1	良	
10	須恵器	甕	(32.0)	27.6	18.7	長石・雲母	灰青	胴上半タタキ 胴下半横削り	3/4	良	常陸產
11	須恵器	甕	-	-	(16.8)	長石 白色針状物	灰黄	胴上半タタキ 胴下半横削り	1/4	稍	在地(中原)
12	須恵器	甕	(23.4)	-	-	長石 白色針状物	灰黄	口縁ナデ 胴タタキ	1/4	稍	
13	須恵器	瓶(伍孔)	(28.2)	24.9	15.2	長石・雲母	青黒	頸部刷毛 胴上半タタキ 胴下半横削り	1/2	良	在地
14	須恵器	瓶(伍孔)	21.8	11.6	12.9	長石	灰青	胴上半タタキ 胴下半横削り	3/4	稍	

平坦面は、カマドの機能に何らかの関りがあるものと思われる。

覆土は、床面直上が褐色土で、その上を暗褐色土が覆っている。周溝内には、固く締まった黄褐色土が認められる。暗褐色土層の上部において、貝殻の集中したブロックが認められた。

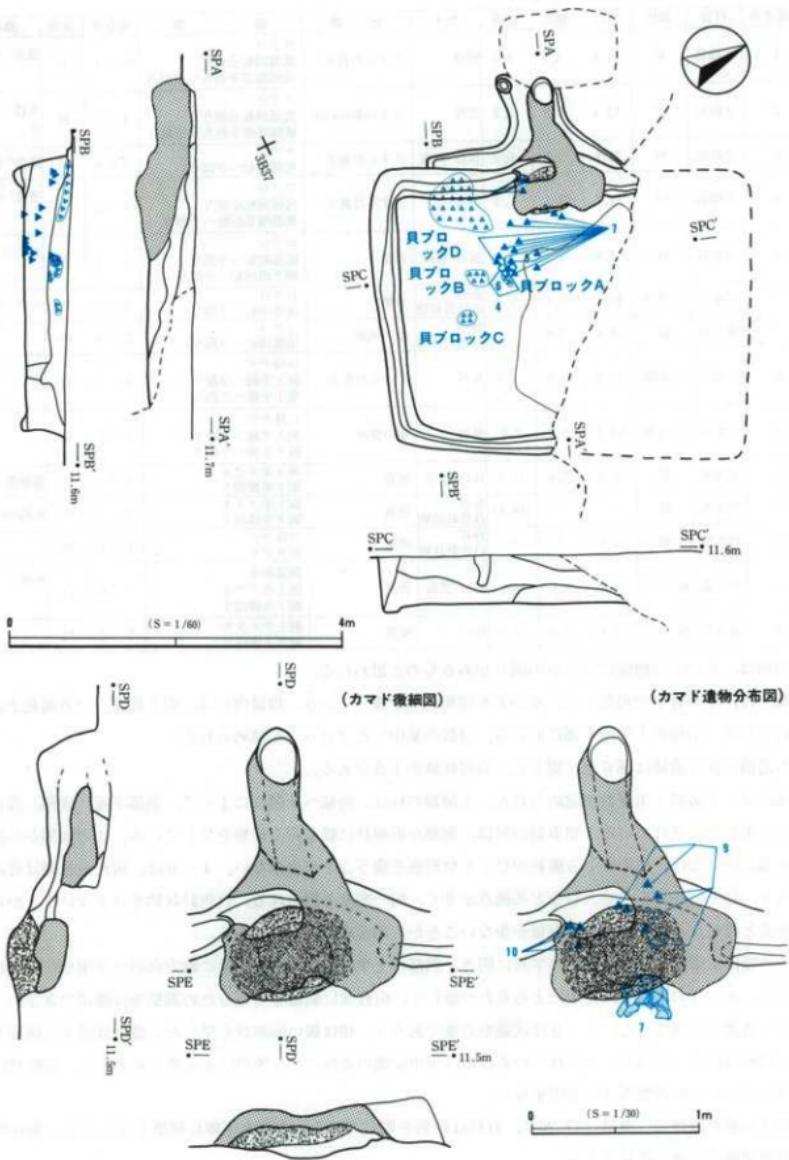
本遺構に伴う遺物は杯6点、甕5点、石製鋤鍤車1点がある。

杯には、土師器と須恵器が認められた。土師器の杯は、回転ヘラ削りによって、胴部下端、底部、高台の造り出しがなされている。須恵器の杯は、胴部が直線状に緩く開く形態を呈している。4の底部から胴部下端にかけては、使用による磨耗がひどく整形痕を窺うことが出来ない。4~6は、何れも色調は青みがあり、胎土に長石を多く含むなど共通点が多く、同一窯産と思われる。白色針状物を含まないことから、常陸產と思われるが、雲母の含有量が少ないとから地元産の可能性もある。

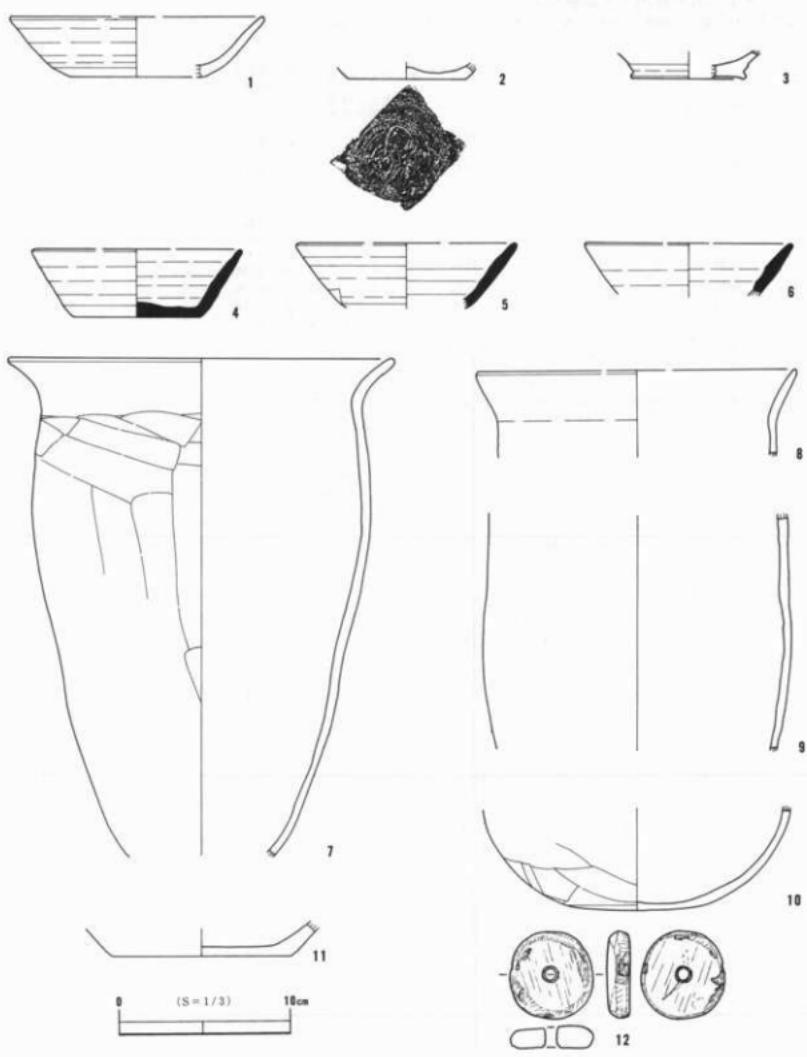
7の甕は土師器で、口縁がくの字状に開き、胴部の上半に横方向の、下半に縦方向のヘラ削りが施されている。8~9の器面は、使用による荒れが激しく、痘痕状に剥落しているため調整等は確認できない。胎土・色調・形態等から、7~9は武藏型の甕であろう。10は緩い曲線状を呈した、甕の底部で、胴部下端に斜め方向のヘラ削りが施されている。11は平坦な甕の底部だが、使用による荒れが激しく、痘痕状に剥落しているため調整等は確認出来ない。

12は石製の鋤鍤車。重量は47.26g、石材は砂岩を用いている。全面を丁寧に研磨しているが、製作時の調整剝離の痕跡を散見できる。

1~2、4~6の杯は、カマド前方1m程の床面直上において検出された。甕7は、縦割り半分程がカマ



第21図 S I - 07号跡



第22図 S I - 07号跡出土遺物

ドの手前床面直上において検出され、残り半分程がカマドの前方に飛び散り、一部はS I - 06の覆土中から検出された。9・10はカマド内から検出された。

貝ブロックはA～Dの4か所で検出された。それぞれの量は、貝ブロックAが278.67g、貝ブロックBが103.58g、貝ブロックCが1.26g、貝ブロックDが2,339.54gで、いずれもハマグリ、シオフキがその大半を占めている。

第7表 S I - 07号跡出土土器観察表

探査番号	材質	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	調整	遺存度	焼成	備考
1	土師器	杯	(14.8)	(3.5)	(7.6)	雲母	明るい灰黄	ロクロ 胴下端回転ヘラ削り	1/4	良	
2	土師器	杯	-	-	7.0	雲母・小窓	明るい灰黄	胴下端回転ヘラ削り 底部板糸切り	1/3	良	
3	土師質土器	杯	-	-	(6.6)		明るい灰黄 底部外面黒色	削りだし高台	1/4	良	
4	須恵器	杯	(12.2)	3.9	(7.4)	長石・石英	灰青	ロクロ 胴下端回転ヘラ削り	1/3	良	
5	須恵器	杯	(12.8)	-	-	長石・石英	灰青	ロクロ 胴下端手持ちヘラ削り	1/3	良	
6	須恵器	杯	(11.8)	-	-	長石・石英	灰青	ロクロ	1/4	良	
7	土師器	甕	21.8	-	-	長石	くすんだ黄赤	口縁ナデ 胴上半端削り 胴下半端削り	1/3	良	武藏型
8	土師器	甕	(18.6)	-	-	長石・雲母	くすんだ黄赤	口縁ナデ (胴部被熱による荒れ)	1/4	良	
9	土師器	甕	-	-	-	長石	くすんだ黄赤	口縁ナデ (胴部被熱による荒れ)	1/4	良	
10	土師器	甕	-	-	(8.2)	小窓	暗い灰青	胴下端削り	1/4	良	
11	土師器	甕	-	-	(10.4)	長石	明るい灰黄	口縁ナデ (胴部被熱による荒れ)	1/4	良	

第8表 S I - 07号跡出土貝殻ブロックA集計表

種名	6mm以上				6mm以下							
	右	左	破片	右	左	破片	合計	比率	右	左	破片	合計
個数	g	個数	g	個数	g	個数	g	個数	g	個数	g	g
ハマグリ	30	28.33	30	30.48	219	79.80	ハマグリ	0	0.00	0	0.00	39.63
シオフキ	7	6.85	7	6.17	102	38.00	シオフキ	0	0.00	0	0.00	30.3
アサリ	0	0.00	0	0.00	4	1.81	アサリ	0	0.00	0	0.00	1.72
ウミナ	0	0.00	0	0.00	0	0.00	ウミナ	0	0.00	0	0.00	0
カキ	0	0.00	0	0.00	0	0.00	カキ	0	0.00	0	0.00	0
不明	0	0.00	0	0.00	14	1.12	不明	0	0.00	0	0.00	9.93%
骨	0	0.00	0	0.00	2	0.71	骨	0	0.00	0	0.00	0.71
小計	37	35.18	37	36.65	341	121.44	小計	0	0.00	0	0.00	1162
中計				415	193.27	中計						84.19
												277.46

第9表 S I - 07号跡出土貝殻ブロックB集計表

種名	6mm以上				6mm以下							
	右	左	破片	右	左	破片	合計	比率	右	左	破片	合計
個数	g	個数	g	個数	g	個数	g	個数	g	個数	g	g
ハマグリ	11	11.93	6	4.36	39	9.41	ハマグリ	0	0.00	0	0.00	25.70
シオフキ	3	3.64	4	1.25	83	44.35	シオフキ	0	0.00	0	0.00	49.24
アサリ	0	0.00	0	0.00	8	3.82	アサリ	0	0.00	0	0.00	3.82
ウミナ	0	0.00	0	0.00	1	0.18	ウミナ	0	0.00	0	0.00	0.18
カキ	0	0.00	0	0.00	0	0.00	カキ	0	0.00	0	0.00	0.00%
不明	0	0.00	0	0.00	66	24.64	不明	0	0.00	0	0.00	24.64
骨	0	0.00	0	0.00	0	0.00	骨	0	0.00	0	0.00	0.00%
小計	14	15.57	10	5.61	197	82.40	小計	0	0.00	0	0.00	103.58
中計					221	103.58	中計					

第10表 S I - 07号跡出土貝殻ブロックC集計表

種名	6mm以上				6mm以下							
	右	左	破片	右	左	破片	合計	比率	右	左	破片	合計
個数	g	個数	g	個数	g	個数	g	個数	g	個数	g	g
ハマグリ	0	0.00	0	0.00	4	0.22	ハマグリ	0	0.00	0	0.00	0.26
シオフキ	0	0.00	0	0.00	0	0.00	シオフキ	0	0.00	0	0.00	0.00%
アサリ	0	0.00	0	0.00	0	0.00	アサリ	0	0.00	0	0.00	0.00%
ウミナ	0	0.00	0	0.00	0	0.00	ウミナ	0	0.00	0	0.00	0.00%
カキ	0	0.00	0	0.00	0	0.00	カキ	0	0.00	0	0.00	0.00%
不明	0	0.00	0	0.00	10	0.90	不明	0	0.00	0	0.00	0.78%
骨	0	0.00	0	0.00	1	0.01	骨	0	0.00	0	0.00	0.01
小計	0	0.00	0	0.00	15	1.13	小計	0	0.00	0	0.00	1.26
中計					15	1.13	中計					0.01

第11表 S I - 07号跡出土貝殻ブロックD集計表

種名	6mm以上				6mm以下							
	右	左	破片	右	左	破片	合計	比率	右	左	破片	合計
個数	g	個数	g	個数	g	個数	g	個数	g	個数	g	g
ハマグリ	82	138.00	78	129.00	743	262.00	ハマグリ	5	1.18	10	1.48	1.599
シオフキ	112	212.00	119	202.00	1,857	863.00	シオフキ	24	5.33	25	6.02	2,488
アサリ	1	0.89	2	5.72	15	9.26	アサリ	0	0.00	0	0.00	11
ウミナ	0	0.00	0	0.00	1	0.19	ウミナ	0	0.00	0	0.00	0.19
カキ	0	0.00	0	0.00	15	5.01	カキ	0	0.00	0	0.00	46
不明	0	0.00	0	0.00	233	38.97	不明	0	0.00	0	0.00	926
骨	0	0.00	0	0.00	0	0.00	骨	0	0.00	0	0.00	23
小計	195	350.89	199	336.72	2,864	1,178.43	小計	29	6.51	35	7.50	5,193
中計					3,258	1,866.04	中計					5,257
												401.50

第12表 S I -07号跡出土貝殻長集計表

mm	ブロックA		ブロックD	
	ハマグリ	シオフキ	ハマグリ	シオフキ
30~40	1	1	5	10
40~50	0	0	0	21
50~60	0	0	0	0
60~70	0	0	1	0
合計	1	1	6	31

が認められた。その他に東壁際に深さ0.3mほどの小ビットが1基、また南壁には、半円形のテラス部分が認められた。

カマドは、西壁の一部を掘り込んで燃焼部から煙道を作り出している。また、床面に残る両袖の長さは0.2mほどと短いが燃焼部に残る焼土は広範囲に広がっており、使用頻度が高かった様子を窺うことができる。

覆土は、床面直上に薄く褐色土が点在し、その上を暗褐色土が覆っている。周溝内には、固く締まった黄褐色土が認められ、東壁際の小ビット内には、明黄褐色土が認められた。床面の一部には、ロームブロックを含んだ黄褐色土による厚さ0.1m程の貼り床が施されている。

本遺構に伴う遺物は杯5点と甕1点、壺2点、鉄滓2点である。

杯には土師器と、須恵器が認められた。土師器の杯は、底部回転糸切り後に周縁に回転ヘラ削りを施している。須恵器の杯には、底部回転糸切り後に周縁に回転ヘラ削りを施したものと、手持ちヘラ削りを施したものとが認められる。3の杯は、胎土の混入物が少なく、焼成も不良で、体部の上下で色調が異なっている。在地窯産と考えられる。4・5の杯は、胎土に長石や小礫を多く含み、焼成は良で常陸窯産と考えられる。

甕6は須恵器で、胴部に叩き目が認められ、在地窯産と考えらる。

壺は、頸部下半7とフラスコ型壺の胴部8で、一部に自然釉が付着している。

9・10は鉄滓で、9は重量240g、一部に鏽が生じている。10は重量103g、裏面に木炭痕が認められる。共に炉内滓と思われる。

遺物は、3の杯がカマドの手前床面直上において、正位で検出され、6の甕がカマド前方1m程の床上0.1m、7の壺がカマド前方2mほどの暗褐色土上層で検出された。

S I -09号跡 (第25・26図、図版6・9)

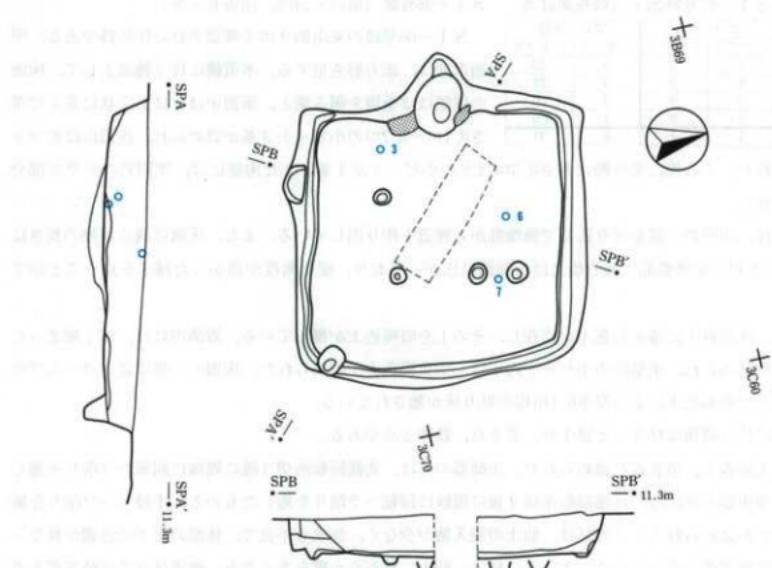
S I -08号跡の東南約5mで検出された住居跡である。平面形態は、正方形を呈する。東・西辺の一部と床面の一部が、掘立柱建物の柱穴によって破壊されている。本遺構に伴う施設として、床面の壁際全周を廻る溝と、北辺中央のカマドが認められた。その他に深さ約0.1mの小ビットが東辺に沿って2基認められた。柱穴の可能性もあるが、西辺沿いには同様のビットは認められない。

カマドは、北壁の一部を掘り込んで煙道を作り出している。また、床面に残る両袖の長さは1mほどで燃焼部に残る焼土は厚く堆積しており、使用頻度が高かった様子を窺うことが出来る。

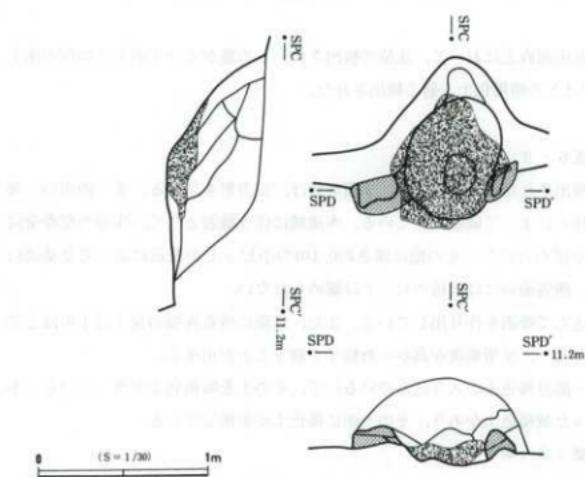
覆土は、床面直上が褐色土（一部黒褐色土が入り込んでいる）で、その上を暗褐色土が覆っている。小ビットは、基底直上に固く締まった黄褐色土があり、その上面に褐色土が堆積している。

本遺構に伴う遺物は杯8点と甕3点、壺1点である。

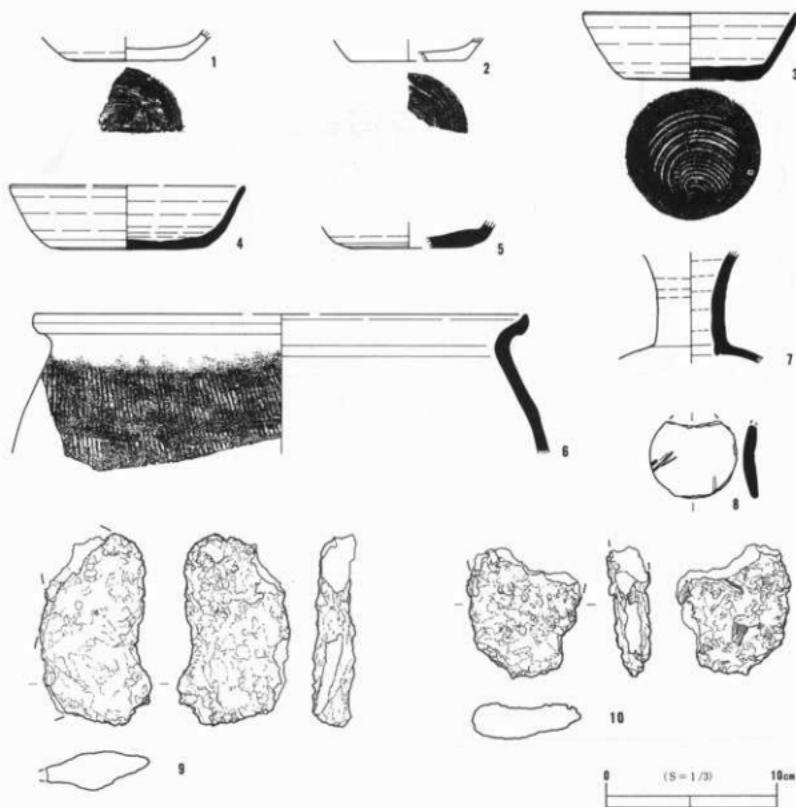
1~8は土師器の杯であり、墨書が施されたものも認められる。1は厚みがあり、焼成は不良で胴部は



(カマド微細図)



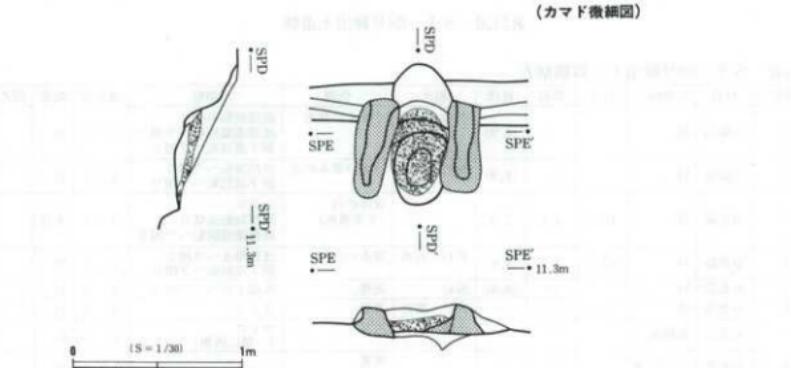
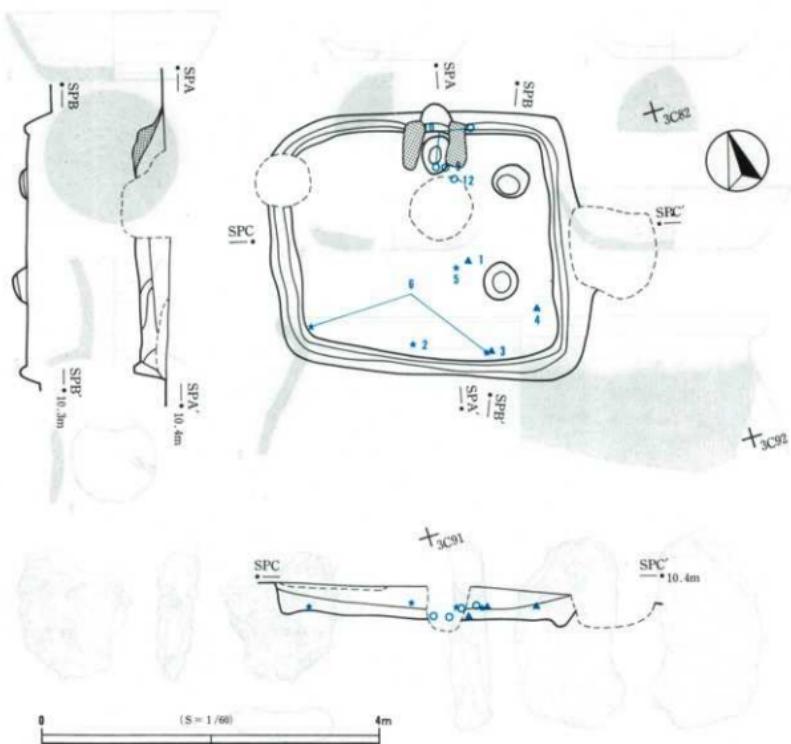
第23図 S I - 08号跡



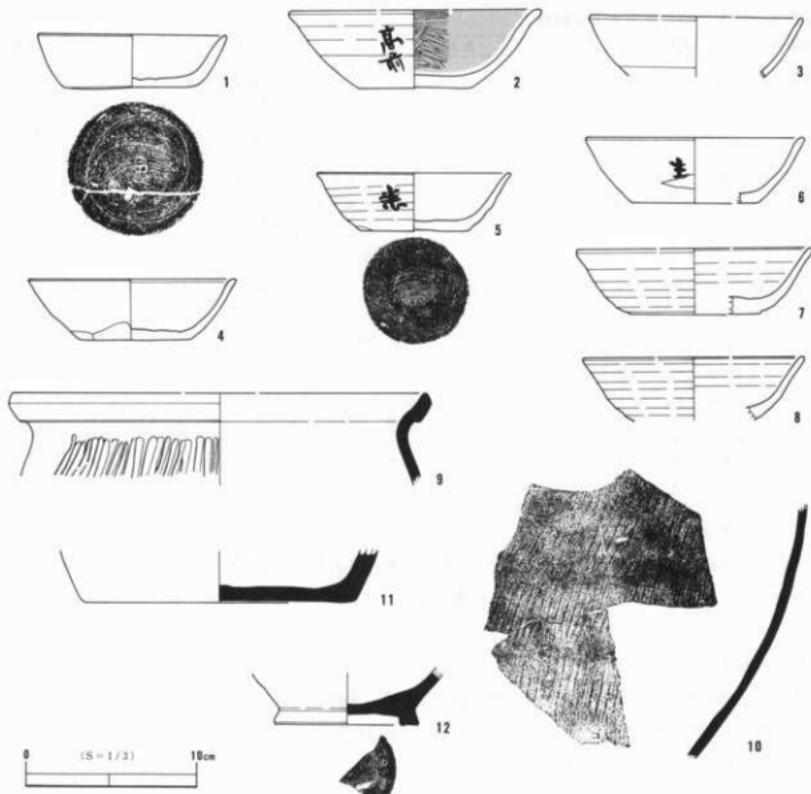
第24図 S I - 08号跡出土遺物

第13表 S I - 08号跡出土土器観察表

探査番号	材質	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	調整	遺存度	施成	備考
1	土師器	杯	-	-	(6, 9)	雲母	くすんだ黄赤	底部回転系切り 底部端部回転へラ削り 胴下端回転へラ削り	1 / 4	良	
2	土師器	杯	-	-	(6, 8)	長石・雲母	うすい紫みの赤	底部回転へラ削り 胴下端回転へラ削り	1 / 4	良	
3	須恵器	杯	12, 4	4.1	7.9		黄みの白 (下半茜色)	ロクロ 底部回転系切り 底部端部回転へラ削り	3 / 4	不良	
4	須恵器	杯	(13, 6)	3.7	(8, 8)	長石・石英	黄みの白	底部静止へラ削り 胴下端回転へラ削り	1 / 3	稍	
5	須恵器	杯	-	-	(8, 6)	長石	灰青	底部手持ちへラ削り	1 / 4	良	
6	須恵器	杯	(28, 6)	-	-	長石・雲母 青墨		タタキ	1 / 4	良	
7	須恵器	長頸瓶	-	-	-	小曜	灰黄	ロクロ (一部に灰釉)	1 / 4	良	
8	須恵器	フラスコ瓶	-	-	-		灰黄	(一部に灰釉)	1 / 4	良	



第25図 S I - 09号跡



第26図 S I - 09号跡出土遺物

あまり開かずに立ちあがる。底部は回転糸切り後、周縁に回転ヘラ削りを施している。2～8は、器壁が薄手で、焼成は良、胴部は開き氣味に立ちあがる。また、2・3は回転ヘラ削り、4は手持ちヘラ削りが体部下端に施されている。2の内面は、ヘラミガキ後に炭素を吸着させ、黒色を呈している。2・5・6の胴部外面にそれぞれ「高前」・「悉」・「生」と墨書きされている。

9～11は須恵器の甕であり、折返し口縁（9）で、胴部に縱位の叩き目が認められ（10）、胴部下端は斜め方向の削りが施されている（11）。地元窯産の同一個体であろう。

12は須恵器の壺で、胎土は精製され、内面に自然釉が認められる。関東以西からの搬入品であろう。

遺物の出土状態は、1～6の土師器杯が中央より南側褐色土中から検出され、9・10・12の須恵器は、カマド周辺から検出された。

第14表 S I - 09号跡出土土器観察表

神函番号	材質	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	調整	遺存度	焼成	備考
1	土師器	杯	10.3	3.1	7.9	長石	くすんだ黄赤	ロクロ 底部回転糸切り 底部端部回転ヘラ削り	1/1	不良	
2	土師器	杯	(14.7)	4.7	6.6	長石 白色針状物	くすんだ赤みの 黄	ロクロ 胸下半回転ヘラ削り 内面ヘラ磨き・黒色處理	3/4	良	墨書き「高前」
3	土師器	杯	(12.2)	—	—	金雲母	くすんだ黄赤	ロクロ 底部回転ヘラ削り	1/4	良	
4	土師器	杯	12.1	3.6	6.5	長石	くすんだ黄赤	ロクロ 底部手持ちヘラ削り 胸下半手持ちヘラ削り	1/1	良	
5	土師器	杯	11.3	3.4	6.4	雲母	うすい紫みの赤	ロクロ 底部回転糸切り 底部端部回転ヘラ削り 胸下半一部手持ちヘラ 削り	1/1	良	墨書き「悉」
6	土師器	杯	12.6	3.9	(7.2)	雲母	うすい紫みの赤	ロクロ 底部回転ヘラ削り	1/2	良	墨書き「生」
7	土師器	杯	(13.6)	3.8	7.8	長石	くすんだ黄赤	ロクロ 底部静止ヘラ削り	1/4	良	
8	土師器	杯	(12.8)	—	—	雲母	暗い黄赤	ロクロ	1/4	良	
9	須恵器	甕	(23.8)	—	—	長石	青墨	タタキ	1/4	良	
10	須恵器	甕	—	—	—	長石	青墨	タタキ	1/4	良	
11	須恵器	甕	—	—	(16.1)	長石	青墨	胸下半ヘラ削り	1/4	良	
12	須恵器	甕	—	—	(8.4)	長石	灰青	ロクロ	1/4	良	

## (2) 掘立柱建物跡と遺物

埋没谷への落ち際に、2棟の掘立柱建物が近接して検出された。発掘時においては、3棟の集中と捉えられたが、うち1棟は、ピットの数や、その配置から、建物跡では無いと判断した。

## S B - 01号跡（第27図、図版6）

本調査範囲南東よりで検出された掘立柱建物跡である。東西3間、南北2間の長方形を呈する。柱の掘り方は径1m弱の円形を呈し、確認面からの深さは約0.5mを計る。柱は抜き取られているが、1間の長さは、柱心間で2m程と考えられる。

## S B - 02号跡（第28・29図、図版6・9）

S B - 01号跡の東約2mで検出された掘立柱建物跡である。S I - 09号跡の覆土を掘り込んで構築されている。東西2間、南北2間の方形を呈するが、西辺真中の柱穴は確認できなかった。柱の掘り方は径0.8m弱の円形を呈し、確認面からの深さは約0.5mを計る。1間の長さは、柱心間で2m弱と考えられる。

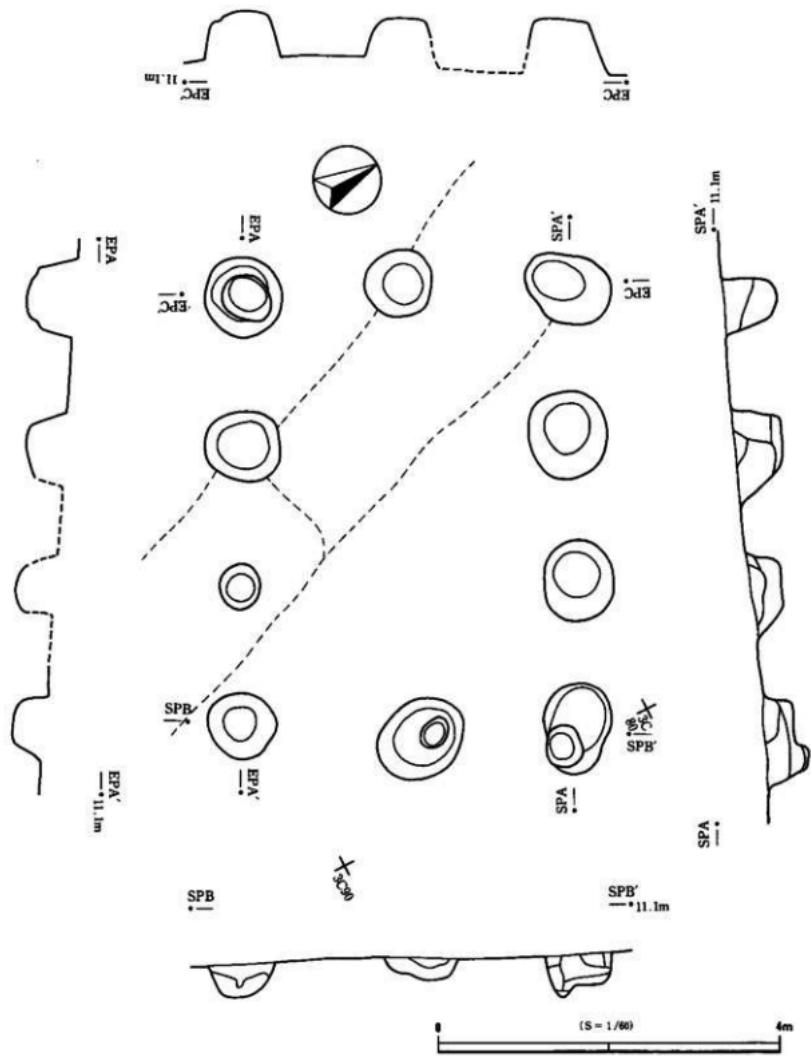
本遺構に伴う遺物として、灯明皿1点が南西隅の掘り方から出土した。

1は、土師器の杯で、底部は回転糸切り後、周縁と体部下端に手持ちヘラ削りが施されている。内面に灯心による煤の付着が見られ、4回以上灯明具として使用されていたことを窺わせる。

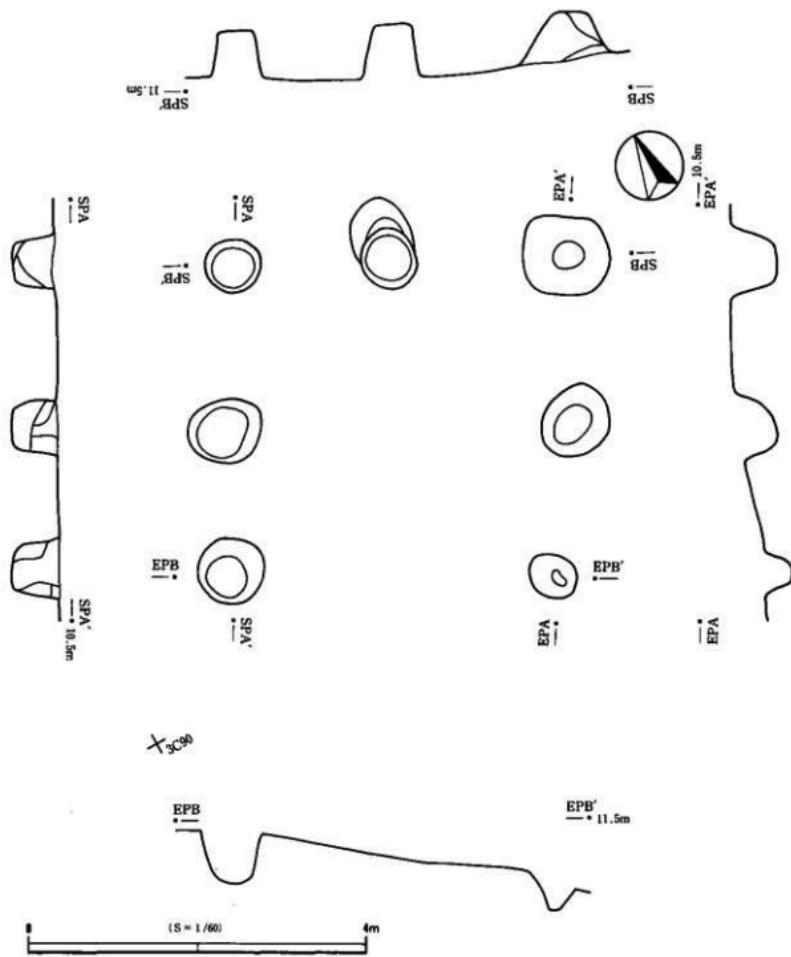
## (3) 土坑

## S K - 01号跡（第30図）

S I - 07号跡の西約1mで確認された長径約1.4m、短径約0.9m、深さ約0.2mの土坑である。S I - 07号跡のカマドの煙道の一部を破壊して掘り込まれている。覆土の堆積は、黒褐色土1層である。



第27図 SB-01号跡



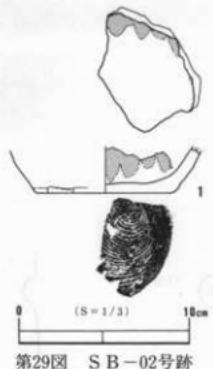
第28図 S B - 02号跡

第15表 S B - 02号跡出土土器観察表

掲図番号	材質	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	調整	遺存度	焼成	備考
1	土師器	杯	-	-	(7.8)	長石・石英	くすんだ黄赤	底部圓軸み切り 底盤端部手持ちへラ削り 脚部下半手持ちへラ削り	1 / 4	良	灯明里

2号土坑（第30図）

S I - 02号跡の床下において確認された長径0.9m、短径0.7mの土坑である。覆土は暗褐色土に黒褐色土が混ざったもので、S I - 02号跡構築の際埋め戻されたものと考えられる。発掘調査時には、S I - 02号跡に伴うものと考えられたが、覆土等から考えて別遺構と判断し、新たに2号土坑とした。



第29図 SB-02跡  
出土遺物

#### (4) ピット群

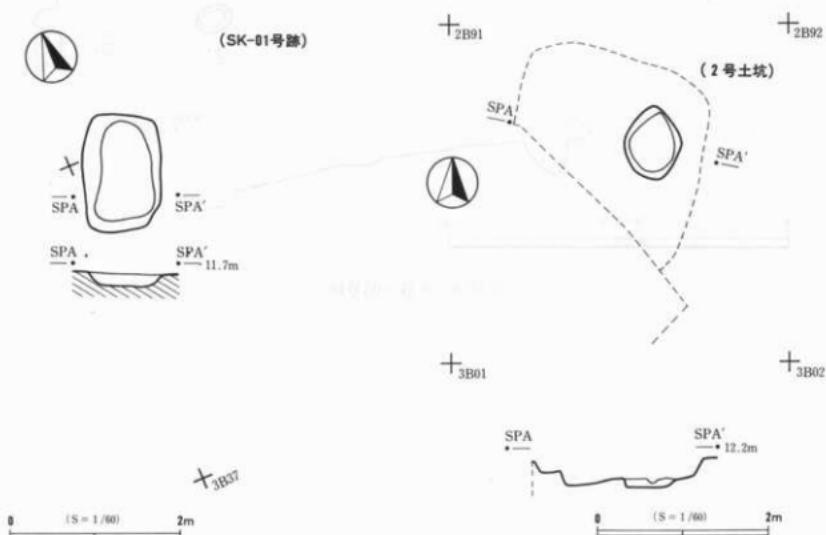
調査範囲の北側と、南側の埋没谷縁辺で群集する小ピットが確認された。南側のものは、据立柱建物と判断して発掘調査されたが、整理作業を通して、その配列等から建物跡では無いと判断したものである。そのため遺構名が「S B-03」となっている。なお、北側のものは「北ピット群」と称する。

#### S B-03号跡（第31図）

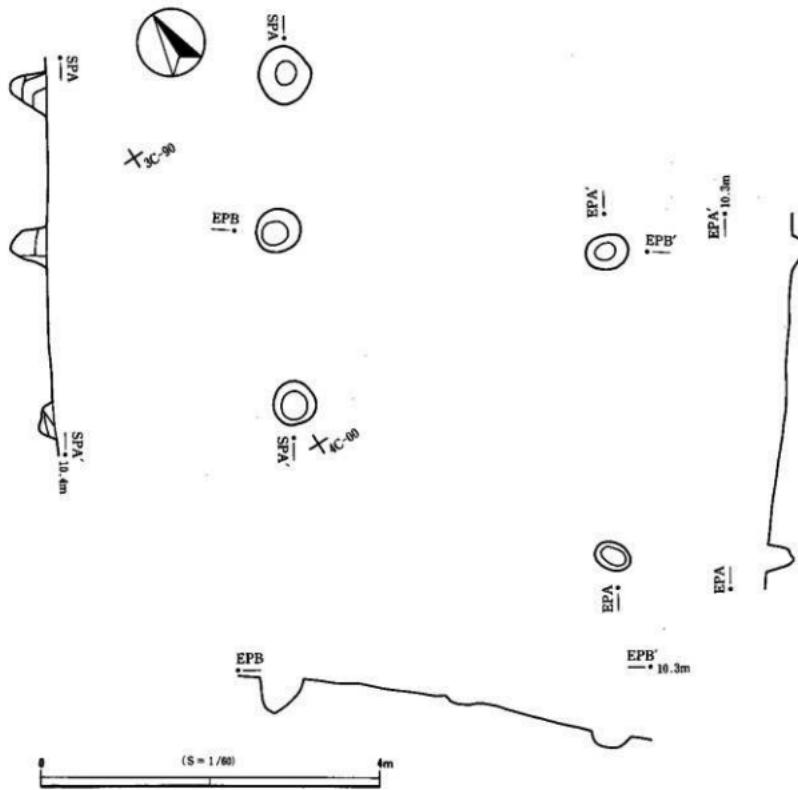
S B-02号跡の南約2mで確認された5基のピット群である。一部が埋没谷の傾斜面に掘り込まれている。S B-02号跡に伴う柵や板塀の類と思われる。

#### 北ピット群（第32図）

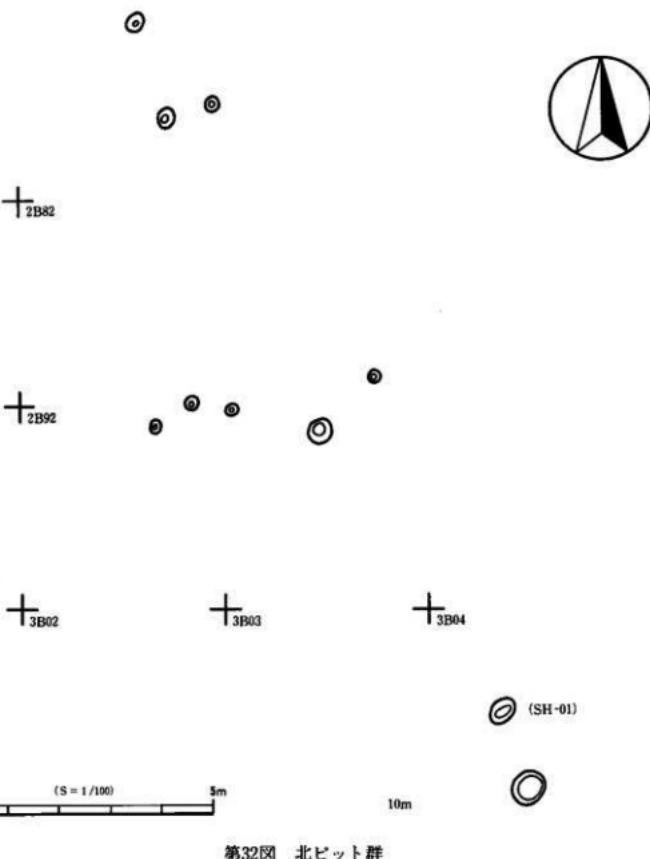
S I-02号跡の東側に広がる10基の小ピット群である。小ピットは、径0.2m~0.5m、深さ0.1m~0.5mほどである。本ピット群中南寄りで確認された1基については、発掘調査時に遺構名「S H-01号跡」として取り扱ったが、単独で意味を有していたものとは考えられなかつたので、ここにまとめて報告する。



第30図 SK-01号跡・2号土坑



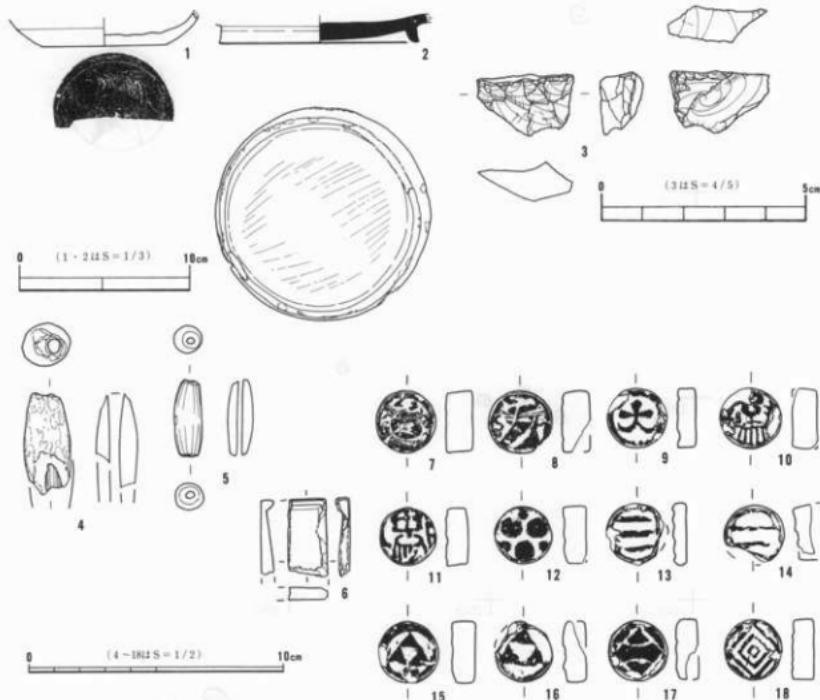
第31図 S B - 03号跡



第32図 北ピット群

(5) グリッド出土遺物 (第33図、図版10)

- 1は、土師器の杯である。底部は、回転糸切り後、ほぼ全面と体部下端に回転ヘラ削りを施している。
  - 2は、須恵器の高台付椀の高台部を転用した硯である。底部外面が磨耗していることから、ここを陸とし、周囲の高台に囲まれた部分を海として、墨磨が行われている。
  - 3は、石英の剥片に細かい剥離痕が認められるもので、火打石と考えられる。
  - 4・5は、大小の土錘である。4の表面は痘瘍状に剥落しており、使用による荒れと考えられる。
  - 6は、片岩製の硯で、大きさから見て、玩具か、朱墨用と思われる。
  - 7～18は、泥面子である。
- 以上の遺物以外に那智黒石の碁石と土製の碁石、近世陶磁器等が検出されている。



第33図 グリッド出土遺物

第16表 グリッド出土土器観察表

持国番号	材質	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	調整	遺存度	焼成	備考
1	土師器	杯	-	-	(7.4)	長石	くすんだ黄赤	底部回転糸切り 底部端部回転ヘラ削り 脚下端回転ヘラ削り	1/4	良	3B-98
2	須恵器	不明	-	-	11.8	長石	灰青	ロクロ 底部回転ヘラ削り	1/4	良	3C-80 転用鏡

### 第3章 まとめ

千葉県の北半を占める下総台地の西側部分、特にその縁辺は、東京湾や江戸川（旧利根川）に面しており、早くから開発が盛んであった。近世における船橋市などは、佐倉街道（成田街道）、御成街道、東金街道の交錯する一大ターミナルとして発展し、近代に入っては、習志野原における軍事演習を端緒として、軍関係施設が市川、習志野、下津津に造営されたことにより、江戸川から都川に至る、東京湾沿岸は躍進を続けることとなる。しかし、この繁栄が反面、地域の沿革をより不鮮明なものとしている。習志野市の津田沼駅周辺一帯も、既に都市化しており、中・近世の土地利用状況や旧地形、埋蔵文化財の有無等、その空間のもつ歴史的痕跡を窺うことが困難な状況を呈している。

今回調査した津田沼二丁目遺跡は、この津田沼駅から500mほどの場所に位置し、建造物の立替に伴うものであったため、遺構の残存状態が悪く、遺跡の全容を解明することは困難であった。しかし、奈良・平安時代における遺構群、近世の遺物などが確認され、その一端を垣間見ることは出来た。ここでは、その調査成果をまとめるとともに、その周辺地域における歴史的変遷を概観したい。

#### 旧石器時代

剝片1点であるが、Ⅳ層中から出土していることから考えて、周辺の市街化された地域においても、検出される可能性は高い。今後の調査に期待したい。

#### 縄文時代

石器2点であり、明確な判断は出来無いが、狩猟域として利用された可能性が高い。今後の調査に期待したい。

#### 奈良・平安時代

本遺跡の中心となる時期であり、S I -09号跡とS B -02号跡の間に遺構の重複が認められることから、S I -09号跡の営まれた時期と、S I -09号跡が埋没した後にS B -02号跡の営まれた時期に分けることができよう<sup>1)</sup>。S I -09号跡からは、表面が青墨色を呈する県内産須恵器甕が出土しており、9世紀代に営まれたものと考えられる。S I -09号跡以外の竪穴住居跡については、その出土土器からみて、大きく2時期に分けられる<sup>2)</sup>。ひとつは、口縁部が「く」の字あるいは緩やかに屈曲して大きく広がり、口唇部が丸縁状を呈する武藏型の土師器甕や、新治窯などの常陸産須恵器甕等を伴う8世紀代に営まれたと考えられる。S I -01号跡、S I -02号跡、S I -03号跡と、S I -05号跡、S I -07号跡である。二つ目は、S I -09号跡同様県内産須恵器や、内面黒色処理を施された土師器甕を伴う9世紀代に営まれたと考えられる、S I -06号跡、S I -08号跡と、S I -05号跡である。

S I -05号跡については、須恵器の出土位置が床面近くやカマド内であり、土師器の出土位置は住居跡覆土上層である遺物出土状況からみて、住居としては8世紀代に営まれたものと考えられる。

これらのことから、本遺跡における集落の変遷は、以下のように3期に分けられよう。

### 1期

台地の奥まった個所に展開する、8世紀代の遺構として、SI-01号跡、SI-02号跡、SI-03号跡と、SI-05号跡、SI-07号跡が相当する。

### 2期

台地縁辺に近い個所に展開する、9世紀前半の遺構として、SI-06号跡、SI-08号跡、SI-09号跡が相当する。

### 3期

台地の縁に沿うように展開する、掘立柱建物のSB-01号跡、SB-02号跡と、柵列SB-03号跡が相当する。9世紀後半以降と考えられる。

本遺跡における集落の変遷は、遺構配置から見て、台地の奥から縁辺に向って住居域を移しているものと思われる。

本遺跡においては、1期の杯は、土師器が少なく、須恵器の出土量が多い傾向にあり、その須恵器も、常陸産や南比企産のものが用いられている。9世紀代に入ると土師器の出土量が増え、須恵器においても在地産のものが入り込むようになる。このことは、同時期の下総北西部における傾向と共通しているが、下総北西部においては、常総型の甕が多いのに対して、本遺跡では、武藏形の甕が用いられるなどの相違点も認められる。

### 貝ブロック

今回の調査において、SI-02号跡・SI-07号跡の2軒の住居跡において、覆土中から貝ブロックが検出された。いずれも覆土上層中において検出されたもので、直接住居跡の年代に関するものではない。特にSI-02号跡の貝ブロックは、確認面から検出しており、基本層序の1・2層との関りも考えられるが、この1・2層中において、貝殻は検出されなかったことから、覆土上層に廃棄されたものとした。

SI-02号跡の貝ブロックは、規模が小さく確認できた貝殻から見て、ハマグリ・シオフキが大半を占め、僅かにアサリが認められたに過ぎない。SI-07号跡においては、SI-02号跡に比べればブロック数や量の点で勝っているが、総量的にみて、大きい規模とは言えない。貝の種類についても、ハマグリ・シオフキが大半を占めていることは同様で、その他の種類として、アサリのほかにウミニナ・カキが認められた程度である。

習志野市は、海に近く、貝塚の数が多い。しかしその多くは、近世に形成された可能性が高い。発掘調査によって、貝塚の確認されたものとしては、藤崎堀込貝塚<sup>3)</sup>、谷津貝塚A地点<sup>4)</sup>、同D地点<sup>5)</sup>が挙げられる。藤崎貝塚は、出土土器から見て縄文時代後期に形成されたものであり、谷津貝塚A地点は近世、谷津貝塚D地点は古墳時代後期にそれぞれ形成されたものであることが明かにされている。

夫々の成果を見てみると、谷津貝塚A・D地点の貝の種類は、ハマグリ・シオフキが大半を占め、その他にアサリ・オキシジミ・サルボウ等が、少数認められる程度と共通しているのに対して、藤崎堀込貝塚は、オキアサリが大半を占め、大差がついてハマグリがそれに次ぎ、シオフキ・サルボウは少数派と言ふ傾向を示している。今回の調査結果からみた津田沼二丁目遺跡の貝の傾向は谷津貝塚A・D地点に近いと言えよう。ただし藤崎堀込貝塚は、本遺跡や谷津貝塚に比べれば、幾分内部に位置しており、その地形的な差が影響している可能性は考慮に入れるべきであろう。今後類例の増加を待って再考したい。

- 注1 また、S I-02号跡と、2号土坑との間にも重複が認められるが、2号土坑については、伴出遺物  
がなく、性格を明確に出来ないことから、その時期を特定できないために、本項では言及しない。
- 2 鄭昭英司ほか 1987「房総における歴史時代土器の研究」 房総歴史考古学研究会  
宮内勝巳ほか 1983「シンポジウム資料 房総における奈良・平安時代の土器」 史館同人
- 3 金子浩昌ほか 1977「習志野市藤崎堀込貝塚」 習志野市教育委員会
- 4 白石 浩・新開玲子 1989「谷津貝塚A地点発掘調査報告書」 習志野市教育委員会
- 5 白石 浩・新開玲子 2000「谷津貝塚D地点発掘調査報告書」 習志野市教育委員会

# 写 真 図 版



津田沼二丁目遺跡と周辺の地形（昭和12年撮影）



津田沼二丁目遺跡調査範囲全景



S I -01号跡全景（南東から）



S I -02号跡全景（南東から）



S I -03号跡全景（南東から）



S I - 04号跡全景（北西から）



S I - 05号跡全景（北西から）



S I - 05号跡遺物出土状況（北西から）



S I - 06号跡全景（南西から）



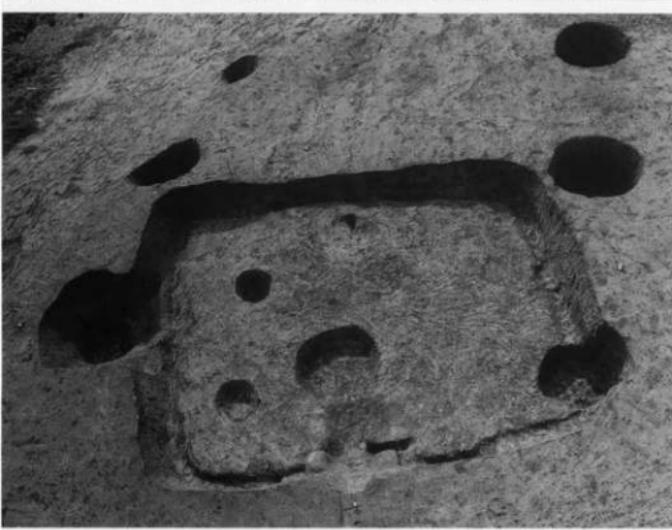
S I - 06号跡遺物出土状況



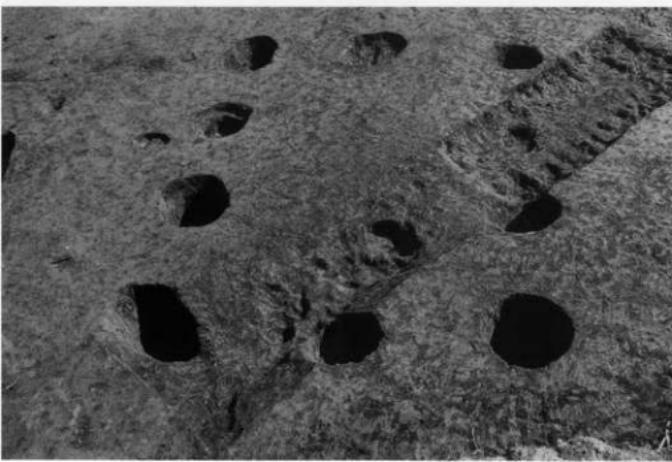
S I - 07号跡全景（南東から）



S I - 08号跡全景（南東から）



S I - 09・S B - 02号跡全景(北東から)



S B - 01号跡全景（南東から）

旧石器時代出土遺物



1

縄文時代出土遺物



1

S I - 02-1

S I - 02-2

S I - 05-1

S I - 05-2

S I - 05-5

S I - 05-7

S I - 05-8

S I - 05-9

S I - 05-10

S I - 05-11

S I - 05-13

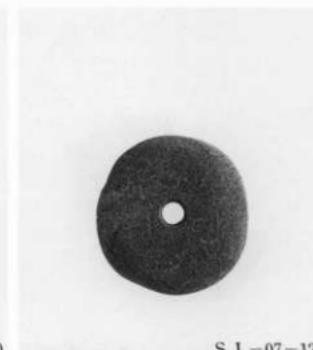
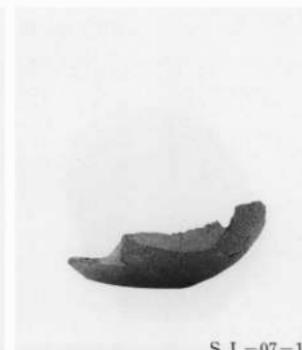
S I - 05-14

S I - 05-17

S I - 05-18

S I - 05-19

出土遺物 (1)





S I - 08 - 3



S I - 08 - 7



S I - 08 - 8



S I - 09 - 1



S I - 09 - 2



S I - 09 - 3



S I - 09 - 4



S I - 09 - 5



S I - 09 - 6



S I - 09 - 7



S B - 02 - 1 (外)



S B - 02 - 1 (内)



S I - 05 - 20



2

グリット出土遺物



4 5

グリット出土遺物

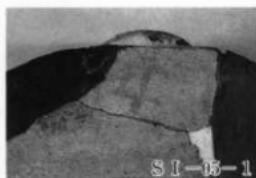


S I - 05 - 21



S I - 08 - 9

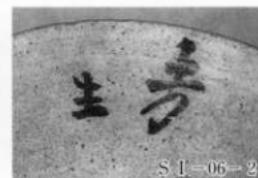
出土遺物 (3)



S I - 05-1

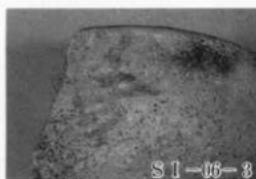


S I - 06-1

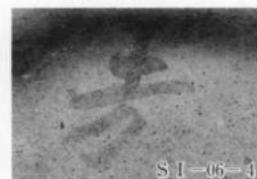


主  
事

S I - 06-2



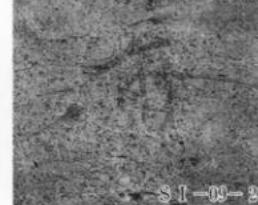
S I - 06-3



S I - 06-4



事

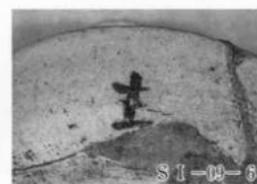


S I - 06-6



事

S I - 09-5



主

S I - 09-6



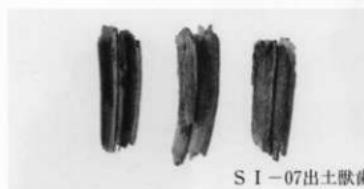
S I - 09-2



S I - 06-5



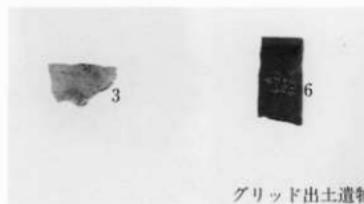
S I - 06-6



S I - 07出土歯齒



グリッド出土遺物 7~18

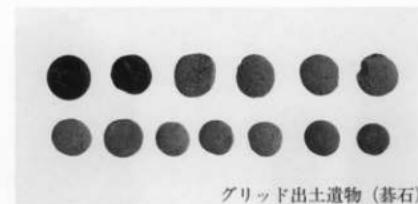


3



6

グリッド出土遺物



グリッド出土遺物 (墓石)

出土遺物 (4)

## 報告書抄録

ふりがな	ならしのしつだぬまにちょうめいせき												
書名	習志野市津田沼二丁目遺跡												
副書名	習志野郵便局・習志野津田沼宿舎新築工事埋蔵文化財調査報告書												
卷次	千葉県文化財センター調査報告												
シリーズ名													
シリーズ番号	第407集												
編著者名	豊田秀治												
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター	TEL 043-422-8811											
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2												
発行年月日	西暦2001年3月31日												

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ 一 ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
津田沼二丁 目遺跡	千葉県習志野市津田 沼二丁目1,846-1	12216	001	35度 01分 01秒	140度 01分 24秒	19990701～ 19990731	1,860m <sup>2</sup>	習志野郵便 局・習志野 津田沼宿舎 新築工事に 伴う埋蔵文 化財調査

		特記事項					
津田沼二丁目遺跡	集落	旧石器時代 縄文時代 奈良・平安 時代	主な時代	主な遺構	主な遺物	東京湾に面する低丘陵上に展開する、 律令時代の集落である。	
				竪穴住居 堀立柱建物	剥片 石鎚 土師器・須恵器 紡錘車・土鍬		

千葉県文化財センター調査報告第407集

## 習志野市津田沼二丁目遺跡

——習志野郵便局・習志野津田沼宿舎新築工事埋蔵文化財調査告書——

---

平成13年3月31日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

発 行 関 東 郵 政 局

浦和市上木崎1-8-30

財団法人 千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809-2

印 刷 株式会社 太陽堂印刷所

千葉市中央区末広1-4-27

---